

正・政・清・聖・性・醒

炉ばたセイ談



平成26年秋号

## 巻頭言一

### セイ談一〇冊刊行記

夜明け前の日課になっている家敷の生垣の道路沿いを掃いて、近くの墓前に線香を立ててお経をあげているとホトトギスがけたたましくあちこちで鳴いています。五月も中旬を過ぎるとこの鳴き声が際立ち、そろそろ梅雨に入ると思うわけです。この渡り鳥は夏までこの山里で過します。最近気がつくことは燕が飛んでこないこと、雀が数少ないことです。田園が広がるこの地方は薬害のせいで昆虫等が湧かないのです。トンボもチョウチョも我が拙宅の庭にも見かけません。

さて、この冊子も一〇年目を迎えました。決して短い年月ではありません。手作りの第一号は役場で印刷してもらった二つ折りの紙を一冊ずつ貞子がホッチキスで止めていたことを思い出します。二号あたりから役場から紹介された印刷所の小父さんが親切でだんだん内容に相応しく冊子も普通並みに見栄えがよくなっていきました。中身はそれぞれ書き手の味が正直に伝わってきました。

貞子が不慮の事故で亡くなり、私の人生は終わったと思いましたが、新しい中西編集長を得て、その間『セイ談』は発行され、桐野会長の円満なお人柄のおかげで仲間も増え仲良く共通の味の濃い体験を重ねました。

そして今、私は長女久子の元、四国にいます。四、五日前に突然坐骨神経痛が発症し、久子が私を入来から拉致してきたと云う訳です。当地の名医二名の診察を受けました。七日にどうしても入来に帰らなければならぬので明日から又通院します。人生長生きしていれば、痛い目にも遭います。しかし、一方の北朝鮮による日本人拉致事件は、いずれ近日中にメテオメテオの終局を迎えることになるでしょう。

この号は書き手の味のある新しい未来を開く記念すべき号になることを信じています。

(四国高松市近郊にて六・三渡潮記す)

卷頭言一

人は意思しない何物にもなり得ない

桐野三郎

人生一度つきり。男一匹でっかく生きるのだ。世に出るときそんな気概は僕にもあった。百貨店に入社。七階建てのビルを見上げて「この社長になろう」と目標設定。人より余計に稼いで余計に楽しむために。定年を迎える頃には夜な夜な美女を侍らせ、自前のヨットの上で豪華なワインパーティーを楽しむぐらいの人生を生きなくっちゃ。

だがこの会社で社長は無理だと判るまで二十年以上かかった。ならば自分で会社を立ち上げるしかない。と四十五で独立。だがこれも社長気分を味わったのはちよんの間。後はご多分に洩れず放漫経営で資金繰りに四苦八苦。十六年かかって周囲に迷惑かけずに整理できたのはむしろめつけ物だったという自分の人生、つまりは己の無能を悟るのに四十年も費やしたという単なるドジ物語だ。

だが近頃になってふと思う。「いや、待てよ。俺の人生けっこう良い線いってるんじゃないか?」と。酒はワインなどより上質の芋焼酎に、つき合ってくる美女たちも単に「元」という一字がつくだけ、場所もヨットなどより遥かに豪華な茅門邸あたりで、庵主をはじめとする錚々たるメンバーと差して呑んでいるのだ。フッフ。「人は意思しない何者にもなり得ない」と言ったのは萩原朔太郎だったっけ? さすがに言い得て妙だよな。だけどこれももちろん入院貞子さんとの幸運な出会いがあったからこそ。彼女はぼくの記憶の中に道祖神のようじ、いまでもあの微笑みを浮かべて立っている。

卷頭言一 セイ談10号刊行に当り 洪朝 (重朝)  
卷頭言二 人は意思しない何物にもなり得ない 桐野 三郎

## 目次

茫々百年	・ ・ ・ ・ ・	入来院重朝	・ ・ ・	1
肺癌の記	・ ・ ・ ・ ・	益寄 滋雄	・ ・ ・	5
直心直伝「ソウルの展示会場で」	・ ・ ・	十五代沈壽官	・ ・ ・	10
お祭り満喫八日間の旅	・ ・ ・ ・ ・	江藤ヤエ子	・ ・ ・	14
至福の時間	・ ・ ・ ・ ・	川涯 利雄	・ ・ ・	19
自虐雑感	・ ・ ・ ・ ・	入来院重伸	・ ・ ・	21
岩村～佐藤一斎～歴史を訪ねる旅 (1)	・ ・	下土橋 渡	・ ・ ・	24
札幌桑園と旧庄内藩士～歴史を訪ねる旅 (2)		・ ・ ・ 下土橋 渡	・ ・ ・	28
開拓使麦酒醸造所～村橋久成～歴史を訪ねる旅 (3)		・ ・ ・ 下土橋 渡	・ ・ ・	32
食べる風景	・ ・ ・ ・ ・	中山とし子	・ ・ ・	38
父親から学んだもの	・ ・ ・ ・ ・	中西 喜彦	・ ・ ・	45
セイシはセイシ	・ ・ ・ ・ ・	澁谷 繁樹	・ ・ ・	54
時の過ぎゆくままに (4)		おじいさんになって死ぬる幸せ		
		・ ・ ・ 桐野 三郎	・ ・ ・	58
編集後記	・ ・ ・ ・ ・	中西・下土橋・澁谷	・ ・ ・	78



第1回入来薪能（平成11年8月28日）

有村美緒子氏（県美術協会会員）によって描かれたスケッチで、新聞でも紹介され、第二回入来薪能のポスターにも使われました。



第1回



第2回



第3回



第4回



第5回



第6回



第7回

— 入来薪能パンフレット表紙 —

- 第1回 平成11年8月28日(土)・天鼓
- 第2回 平成12年8月19日(土)・巴
- 第3回 平成13年8月25日(土)・清経
- 第4回 平成14年9月7日(土)・鳥追舟  
(薩摩川内市総合運動公園多目的広場)
- 第5回 平成16年8月28日(土)・屋島
- 第6回 平成17年8月27日(土)・忠度
- 第7回 平成22年8月28日(土)・巴



### 『貞子の語る「入来文書」』

入来院貞子・著

高城書房／平成24年5月初版発行

『入来文書』が教える  
日本の封建時代の歴史！  
清貧ともいふべき山村入来村に650年  
続いた入来の人々のつつましくも  
礼儀正しい対応が目に見えます。



### 『茅門のある町から - 貞子の徒然草』

入来院貞子・著

高城書房／平成24年5月初版発行

著者は「スーパーばあちゃん」  
行動力は若者顔負け。  
こころ覗けば「文学少女」。  
そんな彼女の涙あり笑いありの  
エッセイ。

# 茫々百年



## 入来院重朝

今年は二〇十四年、丁度百年前第一次世界大戦勃発。四年有半にわたる斬壕戦のあげく、およそ双方で千数百万の戦死者を出したところで、米国の連合軍の参戦によってドイツは敗北しました。とに角、ヨーロッパ各国は総力戦すなわち消耗戦を戦ったあげく死神ヒットラーを産み落としました。

私は一九三二年生まれで満州事変の年です。一九三七年日中戦争、当時支那事変と云いました。ノラクロの漫画全盛の時代です。ヨーロッパでは一九三九年ナチスヒットラーの獅子吼えのもと第二次大戦勃発、片や一九四一

年太平洋で日米対決し、四五年日独は連合軍に降服、ここにおいてアメリカ一国の世界支配体制のスタートが切られました。つまり私の世代は戦争づけのあげく敗戦後六九年、来年は七〇年記念を計画中だとか。その間ただ茫然と白昼夢の中で稼いだゼニは日本のお守り賃としてアメリカが搾り取り、昨今気がつけば日本人の富はここ二〇年来、無利子のまま据え置かれ、利子分は完璧にアメリカに上納されたのです。

かつて私もこの冊子に書いた通り、元来日本は明治帝国憲法下、完璧に無責任国家になったのですが、今や中国（支那）の勃興、アメリカの衰弱を目前にしてやつと目が覚めたようです。ホントに目が覚めたのかどうかちよつとわかりませんが、昨今のトッチャンボーヤの本気振りにまわりはキリキリ舞いさせられている様子はテレビなどの報道で今や

世界中が知るところです。私のかつての予想通りあと二、三回（？）総選挙のあとアメリカのくびきから抜け出し核武装に踏み切るでしょう。そうなつてやつとトッチャンボーヤの主張に世界が耳を傾けるわけです。勿論ロシアは、日本抜きにやつて行けませんから、これもかつて当冊子に書きましたが日口は実質同盟関係に行きつくでしょう。

さてしかし、我が国は今や若い者が結婚せず子供を産まず、つまり衰亡の道に入ったかのようなのです。つまり元気がない。どうしてこうなつたかと云うとワケは簡単です。『男もどき』ばかりで我が国に男がいなくなつたからです。つまり男は通過儀礼が一定の年に必要なのですが、戦後無責任国家であるゆえんである「自主防衛」の四文字が、ケロッと巷間に抜け落ちたまま男の役目がなくなつたかのようだからです。

最近ある雑誌のインタビュー記事で「帝国以後」(この著作は二〇〇二年刊行。世界に衝撃をもたらした)等の著者エマニュエル・トッドが「核武装大国日本への期待」を述べているのをみて矢張りさすがだと嬉しくなりました。世界の識者は正直です。また彼は少子化にストップをかけるのはクニの決断次第だと云っているかのようなのです。つまり教育費をクニが持つか持たないかです。フランスが少子化から反転したのは主に小・中・高・大学の授業料がタダだからでしょう。国家財政の運用の難しいことはどの国も同じ、社会保障費用のかさむのはそしてその是非はその中身によります。

さて最近おめでたい話がありました。日本最古の家系である出雲大社の禰宜の千家国麿さんと高田宮家の次女典子さまとの結婚が五・二七に内定しました。赤ちゃんをたくさん

産んで欲しいです。

元々我が国の骨格は出雲系が形作っていたのですが、平安時代四〇〇年の愉安の末、源平白赤合戦つまり日本の東西勢力の合一をめざしつつまるどころ南北朝合一を経ていろいろあつて徳川江戸時代を経験し、明治維新に到達したのであります。明治はすなわち出雲系長州族による政權奪還だったわけです。靖国神社は、元を正せば長州神社なのです。しかし、今をときめくトツチャンボーヤ総理は真つ当な出雲系の末裔です。明治以来一時昭和の軍全盛を別にと政權をほしいままにしてきたのはほとんど出雲系人脈に他なりません。彼らの特質は官僚制の構築とその運用にたけていること、つまるところ無責任体制に行きつきます。しからば現在トツチャンボーヤ内閣は如何、「内閣人事院」を創設しましたが、これ官僚を自家菓籠中にせんとす

るものです。大臣は勿論出雲系です。なんと云つても我が国の官僚は頭脳明晰優秀さにおいてフランスの官僚とどっこいどっこいでしょう。結局彼等が国の運命を左右するので問題は彼等が無責任の存在だと云うことです。しかして責任は勿論トツプの総理にあります。

そもそも前大戦の敗戦をトツプの責任者昭和天皇をアメリカGHQの悪知恵と共に免責にすることによって、後ろに控えているモロモロのワル一統を放免したことに敗戦後七〇年の我が国の無明の原因があります。

この小冊子十年目に当り重大な世界的スケールでの転機を迎えている今、我が国の現状を鑑みてまさに云いたいことを衣を着せずに書きました。乞寛恕(六・一)

(炉ばたセイ談庵主)



会食風景



炉ばたセイ談 (平成 25 年 10 月 13 日 入院宅にて)

# 肺癌の記

益寄 滋雄



2013年始め頃から風邪気味がとれず熱はないのだが咳が止まらない痰もでる。時には赤い血痰もといった状態が続いて何となくおかしいと思っていたが特にだるいとか疲れやすいとか調子が悪いこともないので放っていた。

知り合いの女性が胸に違和感があると云ってきたので乳線の診察をしたところ右に腫瘤を認め外科受診を勧めた。肺にも所見ありとの診断で根治術を決めたと報告があり、ひよっとすると自分もかと思いい胸部のCT検査を受けたところビンゴ、右肺野に腫瘍があり更に検査を受けたところ肺癌と診断が確定し

た。

7年前に亡くなった家内は胃癌だったが自分は肺かと思った。少々迷ったが地元の友人知人に迷惑をかけぬようにと長男隆雄の母校福岡大学胸部外科を受診しさらに診断が確定した。片肺になると手術を覚悟していが、小細胞癌で、すでに手術の時期は逸し位置的にも放射線療法は不適、抗癌剤による化学療法しかないと言われ完治は望めぬが緩解を期待しようと言われた。職業柄今まで患者さんという他人様にさんざん痛い思いをさせつらい思いを強いてきたのだから今度は自分の番だ。うろたえたそぶりはするまいと決心した。自分では守っているつもりだが端から観るとどうだろう。あまり自信は持てない。

治療法としては約1週間入院し化学療法と経過観察をうけ約3週間のインターバルをおき、繰り返すと予定を立てられた。6クー

ルの予定で副作用が比較的軽かったので8クール受けたところで食欲不振、体重減少、脱毛といった症状に見舞われ、抗癌剤の変更となった。おもしろいことに脱毛は頭髮だけでなく全身で陰毛までなくなり100kgから80kgへ約18kgの体重減と相まって裸になると全身の皮膚がたるみ何とも無様である。元がすごい肥満であったので着衣ではあまりやつれていないとおせじをいってもらえる。

薬剤の変更のみで治療のスケジュールは同様に3週置きの入院を続けている。3日間の抗癌剤の投与をうけて7〜10日目頃の4〜5日間は食欲がなくなり、嘔吐はしないが全く受け付けなくなり全身の脱力感があり、その後徐々に回復してゆき3週後には治療を受けられるようになるのを繰り返している。映像的には悪化していないが腫瘍マーカーの数値が悪く進行しているようだ。医者が一番

困る予後について自分のことになることやっぱり聞きたくなり、今年の桜は見られるでしょうかと来年の正月はどうでしょうなどと、いらぬ質問をついしてしまうと、主治医がしばらく考えて、がんばりましょうといってくれる。可能性はあるのだと自分を慰めている。今日この頃である。

幸い隆雄は祖父鳥越隆雄が創立した薩摩郡医師会病院に勤務していて、午前中は益崎医院の外来を診てくれるので患者さんには迷惑はかけていないつもりだ。

近況報告はこの程度にして、以前に話をしたように思うので重複した話でご迷惑かもしれないが、死に方について話したい。すでに小生には不可となりましたが、我々高齢者にはピンピンコロリが理想ですがなかなかそうはいきません。有るとすれば心筋梗塞か脳出血が事故でしょうが医者に診せると救命処置

をされる事になる。

高齢者が意識を失って呼吸が止まったら人工呼吸器につなぎ栄養補給ができなくなれば中心静脈栄養とか鼻腔経管とか胃婁で栄養補給をするとかいわゆる延命治療です。医者は目の前の患者を生き続けさせるよう訓練されていますから本能的に救命延命処置をとります。これは絶対必要なことです。三途の川を渡れずに帰ってくる人もいるのですから。

でも意識がなく回復する見込みがなくても延命治療は必要でしょうか。本人次第です。どうしても生かしてほしい人も有れば回復の見込みがなければ止めたという人もあります。あくまで本人の意志です。でも意識のない方の意志を確かめようはありません。始めた延命治療は何らかの意思表示がなければ医療関係者はなにもできません。高齢で施設に入所されている方は平生からはつきりした意

志はあまり表明していません。ましてや体調不良となり延命治療を受けている状態で意思を確認などできません。

家族に意見を聞くことになります。どなたもなるべく長く生きさせてと言われます。特に遠方から遅れてきた人ほど強硬に言われます。でも家族の辛抱はほぼ2週間が目途です。その辺で先生今後どうでしょうかと、次にはまだですかと聞く人さえも有ります。そういうわれても医者や看護師が呼吸器とか点滴をはずしたりはできません。殺人罪で訴えられる恐れがあります。詳しく病状を説明して納得してもらったつもりでも後から訴えられたケースがあります。

ではどうすればよいか。家族の方がうっかりして電源をはずすとか点滴を引き抜けばいいのです。でも貴方できますか。それを医者などが勧めたら殺人教唆になります。

リビングウイルとか尊厳死とか聞かれたことはありませんか。生前遺言書などと言われるようですが、「終末期の医療・ケアについて意思表示書」が適当だと思います。大事なことは、医療・介護関係者が理解できるように具体的に書くことです。どんな状態になったら延命を中止して欲しいとか、どの段階を中止の根拠にするかをはっきりしなければいけません。

たとえば、意識喪失なのか意志の疎通ができなくなったらとか、自力で栄養がとれないとか呼吸ができないとか。遺言状とは違いますが、証人などはいりません。パソコンでもタイプライターでもかまいませんが署名と日付は自筆で、認めでいいから捺印しましょう。意識がはっきりしていて理性的な判断ができること、他人に勧められたのではなくあくまで自発的であることを書いた方がよいでしょ

う。サンプルをおみせします。あくまでサンプルです、自由にアレンジしてください。高齢者、少なくとも60歳以上の方に限ります。

(医師)



まつざき医院（さつま町求名）平成26年8月撮影

「終末期医療・ケアへの意思表明書」（サンプル）

私が意識を失うような状態になり、呼びかけに反応しても朦朧として意識はあっても自分の意志を伝えることができない状態になり、自分の事もできず希望も述べられない状態の時は以下のようにしてください。

私が自分の力では水も飲めず、食べ物を食べられなくなったら無理に飲ませたり食べさせたり点滴や栄養補給をしないでください、鼻管を入れたり胃管を作ったりは絶対にしないてください。私が自力では呼吸ができなくなっても人工呼吸器をつけないでください。万一つけられている時は一旦電源を切っていただき自発呼吸が戻らぬ時は呼吸器をはずしてください。多少意識が有ったとしても日時や名前をいえないなど、はっきりと意志を伝えられない場合は同じように扱ってください。

いっさいの延命治療は止めてください。勿論私の痛みや苦しく見える状態を緩和していただける治療は喜んでお受けします。私の命を永らえる為に努力してください。ドクター、ナースをはじめとする医療介護スタッフの方々には心から感謝します。大変申し訳有りませんが、どうか私の意志を尊重してください。

平成二十三年七月一日

鹿児島県薩摩郡さつま町・・・

氏名

八十歳

印

家族署名

五十歳

印

## 直心直伝

「ソウルの展示会場で」



### 十五代 沈 壽官

我家には韓国から御客様が数多く見えらる。有難い事だ。渡来以来四百十五年の歳月を経た今でも、こうして思い出しては訪れて頂いている事に心から感謝したい。

しかし時々、そんな韓国からの御客様に名刺を渡して御挨拶をすると、こう言われる事がある。「十五代沈壽官さんは韓国人でしょう?」「いいえ、僕は日本人です」「でも・・・、血は韓国人でしょう?」「・・・?」このようなやりとりは実はこれまで何度もある。私は、いや私達はこの「韓国人」「日本人」という分類の間(はざま)でこれまで揺れてきたと

いっていい。

そもそも「〇〇人」とは一体何をささるのだろうか?

私は以前、沈家の古い作品を調査する為に、トルコの首都イスタンブールの街を訪れた。ボスフォラス海峡を往来する多くの船を、時折眺めながら、イスタンブールの歴史を読んできた。

紀元前、現在のイスタンブールの地にはアッシリア人と呼ばれる人々が居住していたそうだ。やがてそこへヒッタイト族と呼ばれる人々が侵略してきた。アッシリア人は敗れ、その地はヒッタイト族のものとなったが、かといってアッシリア人は全滅した訳ではない。混住していくのだ。やがて、その地は現在のイランを中心とした大帝国であるペルシア帝国によって併呑されていった。しかし、その

後、マケドニアの若き王アレキサンダーによりその地はギリシャ帝国となり、更には、ローマのジュリアス・シーザーという英雄の出現でローマ帝国へと変わった。そのローマ帝国は東ローマ帝国と西ローマ帝国に分裂しその後、新星セルジュークの登場によりセルジューク・トルコ、次いでオスマン・トルコ帝国へと移り変わり、近代に於いて分割の末、トルコ共和国という当時の帝国の規模からはかなり小さな国（といっても日本などよりは遥かに広大であるが）となったのである。

ギリシャ系の青い瞳に金髪の人やアラブ、北アフリカ系の浅黒い肌に縮れた黒髪の人まで種々の人々がそこには暮らしている。この複雑に混血された彼等を世界の人は「トルコ人」と呼ぶ。

ここで言う「トルコ人」とは、明らかに人種ではなく、正確に言うなら「トルコ国国民」

である。

そして、先に述べた「沈さんは韓国人ですね。血はそうでしょうか？」という問いに戻る。現在の私は「日本国国民」という事になる。勿論、四百十数年前に朝鮮国より移住した歴史的事実はある。それは、アメリカの黒人達が約二百年前に、アフリカ大陸から連行された歴史的事実と同種のものであり、彼等は現在アフリカ人ではなく、「アメリカ合衆国国民」なのである。そして、そのアフリカからの黒人の末裔の一人が現在、第四十四代アメリカ合衆国大統領バラク・オバマ氏その人である。

司馬遼太郎先生は、「民族とは些末なものである。文化の共有固体にすぎず、種族ではない」と明言されている。つまり「日本人」「中国人」「韓国人」と云う『種族』は存在しない、

という事である。そして、現代の碩学（せきがく）静岡県知事 川勝平太氏は「文化」とは「WAY OF LIFE」（生活の様式）である、と述べている。即ち、「民族」とは「生活の様式を共有する人の集りであり、種族ではない」という事になる。生活様式の中には言語、習わし、習慣から、阿吽（あうん）の呼吸まで様々ある。それらは風土によって異なる。極論すると、その様な文化を共有できる人なら、例え肌が黒くても、瞳が青くても同じ民族であると言って良い訳だ。

目立たないが、我々、日本も韓国も実際はトルコと同じ状況、つまり複雑に混血した状況にあると言える。したがって、その中で僕は「日本の生活様子の中で生まれ育った、日本国民の一人」である。そして日本生まれの在日韓国人三世、四世は、もはや明確に韓国系日本人であり、私は古典的（オールドカ

マー）韓国系日本人となる。

しかし、韓国の人々はその様な情緒にはならない。「民族」「血」「種族」「骨」といった漠然とした概念が、はつきりと存在していて欲しいという願望がある。その欲求は現実と交差し、「韓国人」＝「韓民族」（固有種）というイメージになる。自らも遙か昔に中国や北辺の地、あるいは南方から舟でやってきた移住者であるかも、という客観性を口にしながら、それと並立して「韓民族」という純血種の様なものが古代から存在し、自らもその一人であると信じたという、矛盾した思考をする。従って、「沈壽官は血は韓国人韓民族であってほしい」から「沈壽官は韓国人である」になる。

その様に曖昧で、情緒的なものが日本より

比較的多く存在する韓国社会である。しかしながら、私に対する彼らの心情は率直に申し上げると有難いなあとは感じる。

私は先月ソウル市の「芸術の殿堂」という非常に素晴らしい施設で展示会（ソウル新聞社・青松郡主催）を開催していただいた。御挨拶の中で私は申し上げた。

—「薩摩焼の四百年の努力とその成果を韓国人の民族の力であるという自尊心に単純に帰着させて欲しくない。確かに苦難の歴史であった。しかし、同時に日本の社会と相和し、互いを認め合い、日本人に励まされながらここまで来れたのです。そうでなければ『恨み』や『反発』だけで四百年間もの歳月を永らえる事は決して出来ない。薩摩焼とは不幸な時代の風に飛ばされた父なる韓国の種子が、母なる日本の大地で芽吹き花開いたものであり、

この二つの国の恩愛によってここに今在るのです。そこを是非、理解して欲しい。」と。

今回述べた「〇〇人」と云う、ついつい日常的に使う曖昧な言葉は、厳格な視点を持って捉えていけないといけない。さもないと、あの軽薄な政治家達の言葉尻に乗って、世界が大きな過ちを生むのではないかと危惧するからだ。



沈壽官窯にて 平成 21 年 10 月撮影

## お祭り満喫八日間の旅



### 江藤 ヤエ子

二月下旬、甥の嫁・智恵子さんを誘い、ツアーに参加した。

二月二十四日、二十一時二十分、関西空港に集合する。男性一名で他は女性だった。二十三時二十分発のトルコ航空機でイスタンブールに向かう。

二十五日、イスタンブール着、五時四十五分。約二時間待ちで、七時五十五分発の機でベニス着九時二十五分。何時の間にか男性の姿が無い。添乗員に尋ねると、「親戚の方に不幸があり、日本に帰られました」とのこと。葬儀には顔を出さないと、いけないだろう。

外国に行っていたなどと言われるよりは、ツアー代は惜しいが諦めるしかない。

空港から水上タクシーでホテルに向かい、荷物を置いて、市内観光に行く。色々な衣装をした人達に会い、写真を撮した。両親は普通の服装で子供に可愛い衣装をさせている家族もいた。智恵子さんは仮面（眼鏡）を求めて、直ぐに掛けて歩いていった。私も求めたが、帰宅してから壁に掛けて眺めている。ゴンドラにも乗船した。前に来た時には、私たちが乗ったゴンドラの上で男性が素晴らしい声で歌ったことを思い出した。

二十六日。ベニスからパドヴァに向かう。世界遺産の観光である。ジョットの最高傑作があるスクロヴェーニ礼拝堂を見た。宗教画が壁全面に描いてあった。午後はジェノヴァへ向かう。約三六八キロのバスの旅だった。到着して夕食は名物のイカと豆を煮込んだブ



ベニスにてカーニバルの人々と



ベニスの水上タクシーで

リダという料理が出た。

二十七日。ジェノヴァ観光。コロンプスの家を観た。ゲストハウスとして利用されていた貴族の館も見た。昼食後、マントンに移動する。「レモン祭り」で約一四五トンの柑橘類を使用したオブジェが並んでいた。「海底二万里」が今年のテーマだそうだが、海底のイメージは感じなかった。マントンの街には街路樹も柑橘類が植えてあったが、実の付いている木があり、それは酸味の多い木だった。鹿児島桜島ミカンに似た小蜜柑の木もあった。此処に三時間過ごして、モナコ公国へ。世界で二番目に小さな国である。夜景が美しく、私たちは歓声をあげていた。ホテル（フェアモントモンテカルロ）に到着。夕食はチキン料理だった。

二十八日。午前中はモナコ観光。グレースケーリーが眠るモナコ大聖堂や大公宮殿に行

く。公室御用達のチョコレート店「シヨコラトリー・ド・モナコ」にも寄る。大繁盛の店で、皆、お土産を求めていた。買い物をしている間に、添乗員は、私たちのパスポートを預かり、モナコの入国スタンプを貰ってきた。その後、フラゴナール香水工場に行く。

昼食後は、自由行動になり、智恵子さんは友達になった人達と散策に出かけたが。私はホテルの近くを歩くだけにした。急に雨も降り、別のホテルから傘を借りてホテルに戻った。すると、智恵子さんが、傘を返しに出かけてくれた。ホテルの裏側のホテルだったそう。

自由行動になった時、グランカジノを覗いてみた。此処には、カジュアルな服装では入れないので、私もワンピースに着替えて行ったが、カジノをする気はないので、直ぐにホテルに戻った。夕食はポーク料理だった。

三月一日。ニースに移動。約二十分で着いた。紺碧の海岸線が続くプロムナード・デ・サングレをバスから眺めた。マセナ広場では「美食の王様」の写真を書した。王冠を被った大きな人形が右手に御馳走の皿を持ち、左手にナイフを持っていた。それから花市に行く。美しい花が沢山あった。時間があつたので、展望台に登り「天使の湾」を眺めたりして、昼食までの時間を過ごした。

昼食はニース風サラダを食べた。昼食後、観覧席からニースのフラワーパレードを見た。数年前にはブラジルでもパレードは見ているが、その時は、夜で帰国前夜でもあり、半分以上見ずにホテルに戻ったので、今回は、初めから終わりまで見学できて嬉しかった。沢山の花で飾られた色鮮やかな山車が次々に通る。山車の上には美女が乗っていて、観客席にミモザの花を投げしてくれるのだが、私は籤



ニースのフラワーパレード

運が悪く八列目で、前列の人にしか花は届かないのだった。

パレードが終わってフリータイムになった時、前列にいた人が、ミモザを分けて下ったので嬉しく戴いた。夕食までの時間、祭りが終わり、開店したお店を覗き、買い物をした。夕食後モナコへ戻る。

二日。朝食後、モナコから約七キロのエズに行く。此処は驚の巢村と呼ばれているようで、石畳の可愛い街並みだった。周囲からの襲撃を逃れるために築かれた村だった。昼前にニースに戻り、各自で昼食をとる。十四時五十分発の機でイスタンブールに向かう。約二時間五十分で着いた。此処で六時間待ちである。智恵子さん達は、店を覗いて歩いていたが、私は椅子に腰掛けていた。

三日。零時五十分発の機で関西空港に向かう。約十時間五十五分で関西空港着。十八時

四十五分だった。皆と別れ、智恵子さんと大阪駅に向かい、二十一時四分発の新幹線で熊本に向かう。

四日朝、熊本着。甥が駅に迎えに来ていた。私は高速バスで鹿児島に戻る。帰宅したのは、丁度昼だった。

(エッセイスト)



## 至福の時間



川涯 利雄

雨の降らない日は、老人ホームまでの片道一時間の道を歩いて往復する。

二日前、アキレス腱を痛めて病院に行った運動のしすぎだといわれた。今はドクターストップである。アキレス腱はいまだに痛い。今は車で一〇分程度。まことにあつけない。

一時間歩くと、多くの花々・草の実に出会う。野薊の澄みとおる紅紫の花のうつくしさ。緑の葉かげに二つ三つばかり実を結ぶ赤い野イチゴも可憐である。紫のカキツバタに出会うと、人間の品位ということなども考える。

今、合歡の花が咲き出した。宮柵二の憧れた

花である。植物はそれぞれの花の形を持ち、相応の実を持つ。みごとな造形である。

夕方六時過ぎに勤務を終えると、道を海辺にとつて、東シナ海に沈む夕陽を眺めながら歩いて帰る。夕陽の沈む位置が少しずつ北へ動くこともはっきりわかる。河口をさかのぼる満ち潮のすさまじい力。その中を川上にもぼる魚群を感嘆の声を抑えて見守る。豊かな夕潮を分けて港に帰ってくる白い船をときめきながら待つ時間もすばらしい。

上空には、悠然と旋回する鳶の群れ。いそがしく猥雑な感じで中空に騒ぐ鴉たち。振り向きもせず、低く港を横切る孤独な大きなヘラ鷲。

私はこうした自然の変化、その中に生きる生き物たちに、言い知れぬ親しみを感じながら毎日歩いた。友人達と触れ合う時間を失っ

たこの三日間はいかにも惜しい。

(車を海辺に止めて、ゆっくり眺めたらそれでいいのだが、車を使うこの数日は別の用件を妻に命じられて時間の自由がない。)

自然の変化に触れながら歩く往復二時間は至宝というべき時間だった。

私どもの生活には美しい四季がある。十二ヶ月の暦がある。その中に一月一日、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日と節目節目に行事を置いて、人々は生活にメリハリをつけて生きてきた。自然の変化にしたがって農業を営む人々には二十四節季の暦が欠かせなかったことだろう。種まき、施肥、草取り、収穫などは自然の移ろいに添った、静かで智慧に満ちた文化そのものだった。

七十二候という暦もある。毎日歩いていると、七十二候を作った先人たちの感性に驚嘆

する。五日置きに自然ははつきりした変化を示していることに気付いたのである。

毎朝、ほぼ同じ時間にほぼ同じ道を歩くと、日々咲き変わる花々に出会う。おや、数日前に発見した花がもう花を落としている。その傍らにまた新しい花が咲き出している。こういう観察をとおして七十二候の暦は出来たのだろう。

いそがしく奔走してはならない。みごとに自然の変化を楽しみながら、じっくり生きることが大切である。命がたっぷり厚く大きくなった気がする。感性が甦った気がする。アキレス腱の痛みが引いたら、また朝夕一時間の至福のときを楽しみたい。

(歌人、華短歌会前代表)

## 自虐雑感



### 入来院重伸

「自虐史観に陥ることなく、日本の歴史と文化に誇りを持って」 安倍首相が国民に発する強い思いです。この意図に沿った教育改革も最重要政策として急ピッチで行われていきます。

自虐史観に陥らないとは、すなわち東京裁判を否定しアメリカから押し付けられた憲法を否定する、というかなり極端な立場からの物言いなのですが、先のメッセージは違和感なく国民に受け入れられているように思います。

左翼やリベラルな文化人は、国家主義回帰

として強くこれに反発してはいるのでしょう。しかし、彼らの言説はもはや嘲笑の対象でしかなく、その無力さについてさえ誰も問題にしません。

現在の日本国民総右翼という状況を生み出した背景と原因は以下のようなものと思います。

国力の衰退、格差の拡大とともに、将来に希望を持たない若者が急増したこと。

彼らインターネット世代は、その不満の突破口を中韓（特に韓）に求め、不特定多数の人間とこの感情を共有していること。中韓に対する優越感が自尊心を保つための最後の砦になっているのです。

中韓に物申すことをためらう言動はすべて売国行為とされ、結果、朝日新聞をはじめとする大手マスコミ、左翼、リベラル文化人は徹底的に嫌悪されるに至ったこと。

そして彼らネット右翼と称される若年俄かインテリ層と、彼らとは本来相容れなかった反知性主義の一般保守層が、今や「日本つていいよね」という共通の価値観で統一され日本人の主流となったこと、等々でしょうか。

安倍首相の運のよさとは、野党の完全無力に加え、アメリカの言いなりになって従来の保守層から多少の反発を買っても、これら若年層の支持は失わないということですが（彼らの代弁者でいる限りですが）。その政策によって最も不利益を被る層が、最も熱心な応援団なのです。正直笑うに笑えません。

先のメッセージに戻ります。自虐史観とは戦前を悪とする史観ですが、このような史観にわざわざ陥っていた日本人がいたとは不詳私到底思えないのです。東京裁判の当事者や一部左翼以外の日本人には「戦争はもう懲り懲り」という気持ちがあっただけで、糾弾す

べき悪も、責任を取らせるべき悪も、あたかもそんなものははじめからなかったかのごとく生きてきたように思います。むしろきちんと自虐に陥っていたならば、もつとましな国になっていたかもしれません。

日本に誇りを持ってといって、そもそも陥ったこともない自虐史観を持ち出すのはお門違いも甚だしいと言わざるを得ません。日本人の美質とされる人の優しさ、清潔さ等、みな戦後の豊かさによって保たれ培われたものでもあるのです。今この豊かさに不安を生じ、国民が自信を持ってなくなったからといって、国に誇りを持ってないことの罪を自虐史観というでっち上げの冤罪犯に被せ、真犯人がまんまと逃げおおせるでは、為政者として職務怠慢というべきではないでしょうか。

おそらく安倍首相に他意はないでしょう。純粹な思いで先のメッセージを語っているの

だと思えます。とはいえ教育に力を入れるというなら、まず現状足りていないところに十分な予算をつけることが先決で、最優先事項が子供に修正主義史観を教えることであつてはならないと思えます。

中学校時代のY先生のことをよく思い出します。教科は数学だったか古文だったか思い出せません。身長が我々子供達の誰よりも低く、スバル360が先生の愛車でした。

授業が始まる前、悪たれのひとりが黒板の上の方に横一本チョークで線を引き、「Yの限界線」と書きました。教室に入って来たY先生は目をパチパチさせてこれを一生懸命消そうとするのですが、ジャンプしても届かないので皆大爆笑です。

そんなY先生が遠足のバスの中で、当時流行っていた尾崎紀世彦の「また逢う日まで」を歌いました。あまりにも下手過ぎて、一節

ごとに爆笑の渦でしたが、目をキラキラとさせ嬉しそうに歌う先生の姿はなぜか私にとつて終生忘れられないものとなりました。

政権として教育に対する関心が高いのは結構ですが、何を教えるかということに目くじらを立てても意味がないように思います。何を教わったところで、結局残るのはY先生の思い出のようなものなのですから。

母校への思いがそんな他愛もない思い出とともにあるように、母国に対する思いもそこはかとなくあるべきものでしょう。愛国心を教えるという発想には違和感を禁じえませんが。

(キリン社会保険労務士事務所事務長)



## 岩村く 佐藤一斎

― 歴史を訪ねる旅 (1) ―



### 下土橋 渡

西郷隆盛が私淑した人といえば、藤田東湖(常陸国水戸)や橋本左内(越前国福井)、横井小楠(肥後国熊本)の名があげられますが、会ったことはなかったものの、佐藤一斎(美濃国岩村)にも深く傾倒したといわれます。

西郷は、島津久光によって沖永良部島に流罪となり幽閉されますが、その時、持参した佐藤一斎の著書『言志四録』を繰り返し、繰り返し読み、一一三三箇条ある格言の中から特に感動した 一〇一箇条を選んで書き写し、自分だけの『言志四録』(南洲手抄言志録 一〇一箇条)をつくって人生のいましめにしま

した。西南の役において城山で自刃するまで、橋本左内の手紙とともに、この南洲手抄言志録一〇一箇条を肌身離さず身につけていたといわれます。

二〇一四年二月、岐阜県恵那市岩村町を訪ねました。岐阜県の南東端部の、愛知県・長野県ともにもうすぐの所にあります。八〇〇余年の歴史を持つ岩村藩三万石の旧城下町として、日本三大山城の一つといわれた岩村城跡をはじめ、重要伝統的建造物群保存地区に選定された商家の町並みや数多くの旧跡を有する、情緒あふれる史跡観光の町です。そして、佐藤一斎の故郷であり、岩村城址公園には一斎の座像と顕彰碑が建てられています。

佐藤一斎(さとういつさい)。一七七一―一八五九年。江戸時代後期の儒者。美濃(現在の岐阜県)の岩村藩家老・佐藤文永の子として江戸藩邸内で生まれます。早くから読書を好



国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている岩村の町並み



岩村城址公園にある佐藤一斎翁座像（平成14年10月完成）

み、書をよくし、藩主・松平乗蒞（のりもり）の子の林述斎（じゅっさい）とともに学びました。林家の塾頭をへて、昌平黌（しょうへいこう）教授となり、述斎が没すると昌平黌を統括する儒官（いわば現代の東京大学総長に当たる職）を命じられ、広く崇められました。門下生は、三〇〇〇人といわれ、山田方谷、佐久間象山、渡辺崋山、横井小楠など、いずれも幕末に活躍した人材を弟子として輩出しています。

一齋が四〇代から八〇代にかけて著した『言志録』『言志後録』『言志晩録』『言志叢録』（てつろく）を総称して『言志四録』と云い、『人生いかに生きるか』の視点から生き方の原理原則が説かれ、修養処世の書として古くから愛読されています。特に、明治維新で活躍した人たちに大きな影響を与えました。

岩村の古い町並みを歩けば、各家庭の軒下

には、『言志四録』を刻んだ木板が掛けられています。その数は、約二〇〇に及ぶそうです。木板の左下には数字がふってあって、『名言録集』の数字と対応させてその解説を読むことができますようになっていきます。印象に残った格言をいくつかあげてみましょう。

少而学。則壯而為有。

壯而学。則老而不衰。

老而学。則死而不朽。

少にして学べば、則（すなわ）ち壯にして為すこと有り。壯にして学べば、則ち老いて衰えず。老いて学べば、則ち死して朽ちず。（若くして学べば、壯年になって世のため人のために役に立つことができる。壯年になって学べば、歳をとつても衰えない。歳をとり老いて学べば、死んでもその精神は朽ちることな



## 札幌桑園と旧庄内藩士

— 歴史を訪ねる旅 (2) —



### 下土橋 渡

札幌桑園と旧庄内藩士。歴史のつながりというものを感じずにはいられません。歴史のつながり、それは人のつながり、ということになるでしょう。明治維新直後に刀を鋏にかえて桑園の大開墾に挑んだ三〇〇〇人の旧庄内藩士たちの志と魂が、北海道開拓にも活かされていたのを知ったのでした。

#### 一、南洲翁遺訓と松ヶ岡開墾場

江戸薩摩藩邸を焼き討ちし、戊辰戦争において新政府軍に執拗に抵抗した庄内藩（今でいう山形県鶴岡市、酒田市）でしたが、戦後処理に見せた西郷隆盛の温情ゆえに、旧藩士

らは、西郷に敬服し、後年、西郷から学んだ様々な教えを『南洲翁遺訓』という一冊の本にまとめて出版し、全国に配り歩き、その伝道者となりました。

その西郷は、西南の役で鹿児島島の城山に倒れます。明治七年（一八七四年）になると、佐賀の乱、熊本神風連の乱、福岡秋月の乱、山口萩の乱と、不平士族の反乱が相次ぎました。そして、最大規模の士族反乱となったのが明治一〇年（一八七七年）の西南の役でした。旧庄内藩の取り組みは、こうした不平士族の反乱とは対照的なものでした。

明治四年（一八七〇年）の廃藩置県の折、旧庄内藩中老・菅実秀は旧庄内藩士の先行きを考え、養蚕によって日本の近代化を進め、庄内の再建を行うべく開墾事業に着手、明治五年、旧庄内藩士三〇〇〇人が荒野を開墾開拓し、明治七年には三一一ヘクタールに及ぶ

桑園を完成させました。

その『松ヶ岡開墾場』は、現在、国指定史跡となっており、開墾記念日には、旧庄内藩主・酒井忠篤と松ヶ岡開墾の志を支えた西郷隆盛、開墾開拓に取り組んだ重臣の菅実秀の肖像額を飾り、床の間には西郷より贈られた『氣節凌霜天地知』の箴言の掛字を掲げて式典が催されるそうです。

## 二、開拓使と屯田兵

明治二年（一八六九年）、北方開拓のための官庁として開拓使が置かれましたが、樺太に兵士と移民を送り込むロシアの南下政策に強い危機感を抱いた政府は、明治三年に樺太開拓使を設置し、黒田清隆を開拓使次官にして樺太専務を命じました。

ロシアに対抗し得る国力を充実させるためには、北海道の開拓に力を入れるべきだという黒田の建議に従い、明治四年（一八七一

年）に十年間 一〇〇〇万円をもって総額とするという大規模予算計画、いわゆる『開拓使十年計画』が決定されます。

一方、西郷隆盛は、明治四年に部下の桐野利明（西南の役で西郷と共に城山で戦死）に札幌周辺を調査させ、北海道に屯田兵を配備して対ロシア防衛と開拓に当たらせる屯田兵構想を打ち上げ、黒田清隆らに建策しました。

西郷は、廢藩置県による土族らの失業を心配し、彼らを北海道の開拓と防衛に当たらせようと考えたのでした。そして、西郷の屯田兵構想は、鹿児島の外城（とじょう）制度に範を得たものでした。

鹿児島・薩摩藩は城を築かず、領内を百十三の外城に分け、そこに外城士を住まわせて侵略に備えました。外城士は『郷士』と呼ばれる半農半士で、日常は農作業にいそしみ、いざ鎌倉のときは武器を持って城に駆けつけ

ます。まさに屯田兵でした。屯田兵は明治七年（一八七四年）に制度が設けられ、翌年から実施されました。

### 三、札幌桑園の始まり

二〇一二年七月下旬、著者は、屯田兵の史跡を札幌市内の琴似と新琴似に訪ねました。琴似から新琴似に行くには、JR桑園（そうえん）駅で電車を乗り換えなくてはなりません。ホームで電車を待ちながら、この辺りが開拓使の桑園があったところに違いないと思つてみます。

翌日、札幌開拓使麦酒醸造所（現サッポロビールの前身）の生みの親・村橋久成（札幌製糸所の建設も手がけた）の胸像が建てられている北海道知事公館を訪ねました。そのとき、知事公館のある辺りがかつて桑園のあった場所で、札幌の桑園地区は、旧庄内藩士が桑畑を開墾したのが始まりだったことを知っ

たのでした。

明治八年（一八七五年）開拓使は屯田兵に養蚕を勧めるための計画の一つとして、現在の札幌市北1条より北10条、西11丁目から西20丁目の地域を全部桑畑にすることに決めました。開拓使長官となった黒田清隆は、松本十郎大判官と相談して、旧庄内藩士たちを招いて、開墾してもらうことにしました。

札幌に招聘された旧庄内藩士一五六名によつて二十一万坪が開墾され、桑の苗を植える穴が掘られました。旧庄内藩士が帰郷後、開拓使は酒田から桑の苗を買い穴に植え、その後福島や群馬からも苗を買つて植えました。冬、寒さで枯れてしまします。そこで、北海道の山に生えていた山桑に植え替え、桑畑は四十八万坪に拡げられて行きました。

### 四、松本十郎

旧庄内藩士を札幌に招聘した松本十郎と

黒田清隆との係り合いがまた興味深いです。鶴ヶ岡城城下（現山形県鶴岡市）で近習頭取の嫡男として生まれた松本十郎（当時、戸田総十郎）は、戊辰戦争で藩の使者役を務め、各地で新政府軍と戦いますが敗北、藩主酒井忠篤は幽閉されてしまいます。

これに憤慨した松本は、藩主と庄内藩に対する恩赦を嘆願し、これが叶わなければ庄内攻撃の責任者であった黒田と相討ちする覚悟で京都に赴きます。しかし、黒田が西郷隆盛とともに庄内藩の恩赦に奔走していたことを知ると、松本は黒田にその非を詫び、黒田も松本の人物を認めて開拓使入りを勧めました。明治二年（一八六九年）、開拓使入りした松本は、根室国に派遣されて現地の開拓責任者である開拓判官に任じられ、明治六年（一八七三年）には当時次官だった黒田に次ぐ開拓使序列第三位の地位（大判官）につきまし

た。アイヌに理解を示し、アイヌから敬意を払われましたが、樺太のアイヌを北海道に強制移住させて内陸部の農業開拓に利用しようとする黒田清隆と対立し、明治九年（一八七六年）辞表を提出しました。

故郷の鶴岡に帰郷した後は、一介の農民として生涯を送りました。官にあった時も農民だった時も時に酒を親しむ以外は質素な生活に甘んじ、開拓使大判官時代でさえも家に書生をひとり置いただけであったといわれます。

戊辰戦争の戦後処理における西郷の考えは、庄内藩士たちを戦いの相手ではなく、新しい時代の同胞とする考え方でした。そうした人の考えや心をつなぎ、歴史をつないでいくのだな、と感じさせられた札幌桑園のことでした。

（元九州職業能力開発大学校教授）

# 開拓使麦酒醸造所 村橋久成

― 歴史を訪ねる旅 (3) ―



## 下土橋 渡

帯一筋

右ノ者本年九月廿五日當市葺合村ニ於テ疾病ノ為メ倒レ居リ當庁救護中同月廿八日死亡ニ付仮埋葬ス心當リノ者ハ申出ヘシ

明治廿五年十月 神戸市役所

明治二十五年(一八九二年)十月二十二日、  
神戸又新(ゆうしん) 日報に次のような行旅  
病者の死亡広告が掲載されました。

廣告

鹿児島県鹿児島郡塩谷村

村橋久成

一、相貌年齢四十八歳 身幹五尺五寸位  
顔丸ク 色黒キ方薄痘痕アリ 目大ニシ  
テ 鼻隆キ方 前歯一本欠 頭髮薄キ方  
其他常体

一、着衣紺木綿シャツ一枚 白木綿三尺

村橋久成(むらはしひさなり)。一八四二  
〜一八九二年。幕末の薩摩藩士、開拓使官吏。  
札幌開拓使麦酒醸造所(現サツポロビールの  
前身)の生みの親。

薩摩藩御一門である加治木島津家の分  
家・村橋家の嫡男として生まれ、六歳で家督  
を継ぎます。薩摩藩第一次英国留学生、いわ  
ゆる薩摩スチューデントの一人として英国留  
学。帰国後、加治木大砲隊長として二五〇名  
の兵をひきいて戊辰戦争に出軍し、新潟・山  
形・青森そして箱館を転戦。軍監(戦場で軍

の進退などを監督する役目）として箱館戦争に参戦して、箱館病院長の高松凌雲（わが国における赤十字運動の先駆者）を通じて、榎本武揚に恭順を勧告し、五稜郭が落ちて旧幕府軍が降参すると、榎本らの恭順に立ち合いました。

蝦夷地が平定されると軍監を免ぜられて、いったん鹿児島に帰着。戦功により四〇〇両の恩賞を受けます。翌年の明治四年（一八七一年）開拓使に採用。以後、七重開墾場（現北海道亀田郡七飯町）の測量と畑の区割り、屯田兵創設に伴う札幌周辺の入植地の調査と琴似兵村（現札幌市西区）の区割りを行いました。七重開墾場と琴似兵村の立ち上げを終えて東京に戻ると、今度は開拓使が計画中の麦酒醸造所の建設責任者に抜擢されます。

道内の勧業を促進するために建設された他の官営工場と同様の目的で、北海道産のホッ

プによる麦酒醸造所を建設しようというものでしたが、麦酒醸造所は、試験のためにまず東京に建設し、試験の結果をみたくうえで、好成绩なら北海道へ移設するという計画でした。

しかし、村橋は、東京に建設するというのは例によって開拓次官・黒田清隆らの政治的パフォーマンスだと見抜き、北海道における勧業、勧農が目的の麦酒醸造所ならば最初から北海道に建設すべきだと異論を抱きます。

ドイツ帰りの麦酒醸造人・中川清兵衛の雇用を決定し、予定より大幅に遅れて外国注文の醸造備品が届いた明治八年（一八七五年）の暮れ、上局決定を変更し、東京ではなく、最初から北海道に建設することを求める稟議書を提出します。強い反対に合うこと、あるいは村橋が一層好ましくない立場に追いやられることも覚悟しての稟議書提出でした。

村橋の主張は認められましたが、あわせて

葡萄酒醸造所と札幌製糸所も建設せよ、という重圧を負わされての認可でした。明治九年（一八七六年）五月、札幌在勤となった村橋は、中川清兵衛を督励して、麦酒醸造所をはじめ三つの施設建設を急ぎ、同年九月にはすべてを完成させました。もし、村橋の上申がなく麦酒醸造所が東京に建設されていたら、開拓使ビールはどうなっていたか分からなかっただろうと言われます。日本のビール産業の成立は遅れていたかも知れません。

開拓使は、長官の黒田清隆をはじめ、北大の前身・札幌農学校の初代校長を兼務し開拓使廃止後には札幌県令（現在の県知事）をつとめた調所広丈、同じく根室県令となった湯地定基、函館県令の時任為基、屯田兵の父と呼ばれるのちに第二代北海道長官になった永山武四郎といった人びとなど、そのキーマンの



開拓使のシンボルである北極星のマークを掲げた札幌開拓使麦酒醸造所（現サッポロビールの前身）。札幌市のサッポロファクトリー内にある。

大多数が鹿児島県士族で占められていました。鹿児島県士族たちが、黒田を頂点として作り上げられた薩摩閥を最大限に利用して栄進を遂げていくなかで、一人村橋だけは閥に与しません。それがまわりの鹿児島県士族たちとの間に軋轢を生み、一方で、栄達を望まないとは言え、自分だけが取り残されていくのではないかという不安にかられ、村橋は自己嫌悪に陥ります。

明治維新の立役者は下級藩士でした。彼らは、なんの束縛もなく自由に動き回れ、倒幕運動に加わることができました。下級藩士に甘んじてきた積年の思いが一気に爆発し倒幕の原動力となり、国家建設の枢機に参画するエネルギーになったのです。一方、藩のエリートだった上級藩士は、そこまで奔放になれませんでした。加えて、英国留学によって激しいカルチャーショックを受けた村橋は、薩

摩藩という一地域でなく、東洋の中の日本という『国家』を意識し、世界の中の『日本人』ということを意識するようになっていたのかもしれない。

あるいは、薩摩閥の輝かしい栄達振りの陰に、戊辰戦争や箱館戦争で散って行った多くの人たちの影を見ていたのかもしれない。

ビール醸造も軌道にのり、明治十一年には札幌本庁民事局副長に任ぜられ、縦横の活躍ができる晴れ舞台が約束されたという矢先の明治十四年（一八八一年）、村橋は開拓使を突然辞職し行脚流浪の旅に出、以後消息不明となります。明治十四年といえ、十年計画の満期が近くなつた開拓使の廃止方針が固まつた年でした。そして、黒田清隆は、開拓使の事業を継承させるために、部下の官吏を退職させて企業を起こし、官有の施設・設備を安

値で払い下げようとした、いわゆる開拓使官有物払下げ事件を起こし指弾されます。村橋が開拓使を辞職したのはそんなときでした。

それから十一年後の明治二十五年十月二十二日、神戸又新日報に行旅病者の死亡広告が掲載されます。裸同然の状態で施療院に収容された村橋は『鹿児島県士族、村橋久成』だけ言い残して息絶えたといわれます。享年五〇歳。北に夢を追ったサムライは、何を思い流浪の人になったのでしょうか。

あまり知られることもなく歴史に埋もれたままだった村橋久成の名が百年の時を超えて再び登場するきっかけになったのが、昭和五十七年（一九八二年）に刊行された作家・田中和夫氏による小説『残響』（第一六回北海道新聞文学賞受賞）でした。市立札幌図書館が時計台内にあった頃、閲覧用の書架にあった北海道史人名辞典の頁をめくっていた田中

さんは、『村橋久成』という名前に目が止まります。それが村橋久成との出会いのはじまりでした。約五〇〇冊にもおよぶ公文録・申奏録・会計書類などを紐解きながら村橋久成の足跡を突き止め、デリカシーと芯の強さを併せ持った清廉潔白な人物像を描き上げました。村橋久成の名が再び人々の知るところとなると、平成十一年（一九九九年）に北海道久成会が発足し、平成十五年（二〇〇三年）七月



村橋久成胸像（北海道知事公館前庭）

の高橋はるみ知事の道政執行方針演説に村橋久成の功績が取り上げられたのを契機に、『胸像「残響」札幌建立期成会』が結成されます。そして、中村晋也日本芸術院会員によって制作されていた村橋の胸像が、平成十七年（二〇〇五年）北海道知事公館前庭に建立され除幕式へと結実しました。

### — 補遺 —

神戸の路上で行き倒れて凄絶な死をとげた村橋久成の遺骨がどうなったのか長い間知られないままでした。ところが百年近くを経た昭和六〇年（一九八五年）になって、東京・青山霊園に墓碑があることが判明し、東京に在住の実のお孫さんの家から『故村橋久成氏葬儀関係文書』と書かれたひとまとまりの文書類が見つかります。

驚いたことに、村橋久成の葬儀は黒田清隆

をはじめとする開拓使元幹部たちの手によってとりおこなわれていました。村橋の葬儀に関する記録書類とその前後にかねらのあいだでやりとりされた数十通の文書類から、開拓使時代はもちろん、幕末・維新にさかのぼって生死をともにした仲間に対する薩摩人たちの深い温情と、開拓使廃止から一〇年の月日を経てなお生きつづけた同志的結束の強さ、そして、維新から四半世紀を経たこの当時のかれらの様子をうかがい知ることができると、参考図書（二）にあります。

（元九州職業能力開発大学校教授）

### 参考図書

- （一）田中和夫著「残響」文化ジャーナル鹿児島社・一九九八年七月第一刷発行
- （二）西村英樹著「夢のサムライ」文化ジャーナル鹿児島社・一九九八年六月第一刷発行

## 食べる風景



### 中山とし子

最近のテレビ番組はよく知らないが、数年前までは、テレビをつけると、大抵誰かが大げさに食べており、食べ物が画面からはみ出さんばかりに溢れていたように記憶する。大食い競争や、食紀行や、街のおいしいもの屋の発掘といった類だが、その時の食べる所作を見ていられない。チラと見ただけで眉をひそめて切る。切った後も何とも言えない不快感膨らむばかり。

食べる事は人間の本能だから、最も動物的と言えるだろう。その所作には無意識に本人の地が出る。気になるのは、自分と同年代（六

十台）のご婦人たちの食べ方である。口の開き具合や、咀嚼の仕方、箸運びなど、その人の日常生活がそのまま出て、多くの場合、自己を省みずにはいられない。

それ以上に目を逸らさずにおられないのは、飢えと無縁に育った若者が、食物を贅沢に食べ散らし限度以上に口に詰めこんで、己の見苦しさにも気付かぬ姿を見た時である。私は胸の裡で「今にバチが当たるぞ！」と、昔祖母に言われていた言葉を毒づきながら、反射的に、内容は貧弱であったが、最後までおいしく食べきった昭和の中ごろを懐かしく思い出すのである。

私の食卓の風景には、三度の大きな場面の転換がある。

最初は、生まれ育った入来町副田の家。二度目は、二十歳台初めの頃の禅修業の場。

三度目は、嫁ぎ先の食卓である。

最初の、生まれ育った入來の農村地帯にあった実家では、小学生の頃、食事中に話すことは禁じられていた。座卓に家族五人が正座して、

「いただきます」

の号令の後、もくもくと箸を動かす姿が、結婚するまでは普通の家庭の在りかただと思っていた。もちろん年頃になると、肘を突き合わせた妹との小競り合いで、ついおしゃべりやクスクス笑いが始まる。すると母が

「行儀が悪い」

と注意する。喋ると「食卓に唾がとぶ」とか、「食べ物への感謝が足りない」とかいうわけである。あのころは米一粒への感謝が食べる基本にあった。おきまりの「米を粗末にすると目がつぶれる」という「迷信」も健在で、幼いころは結構効き目があった。

私の周りの家庭がほぼこのようだったかと問われれば、今になると自信はないが、正月やお盆に親戚にお呼ばれに行くと、並べられたお膳の前に正座して、もくもくと食べた覚えがあるので、少なくとも私の親戚関係ではそうだったと思う。

因みに、隣家の夫婦は、母の兄と父の妹が結婚した夫婦であった。我家とは血の濃い親戚である。これほどの濃い関係であっても、この地では、他家を訪問したら時候の挨拶方々、まず、「おせつきやんそ」（お忙しい事でしょう）と、一旦立ち止まって両足を揃え、両手を太ももの辺りに置いて軽く頭を下げながら挨拶するのが、三十年前までは普通のことであった。対する迎える方は、畳に正座し、両手を畳について頭を下げながら、「こら、おせつきやんそ」（そちらさんもその通りでございましょう）と同じ挨拶を返す。（註）これが



1960年（昭和35年）台の到来の田園と愛宕山（藪牟田山系）

済むと急にくだけて親しい調子になり、普段の会話が始まるといった按配であった。今は亡き義父が、結納のため初めて我が家を訪れ、この「やりとり」を見た時、こう言った。

「儀式か芝居のようやな」

と。婚家は三重県の小さな海辺に住まっている。隣近所は大方親戚ばかりという、パラダイスのような村である。ともあれ、私が結婚した昭和五十年頃の到来の実家はこのようであり、自分ではこれを奇妙などとは思わなかった。

二度目の場面は、禅堂での食事である。二十歳から曹洞宗の禅寺に通い、禅狂いをしてきた。曹洞禅では、面壁していた体を百八十度返して禅堂の中に向き直り、跏坐（足を組んで坐ること。結跏趺坐と半跏趺坐がある）した足の前に什器を据え、様々な決まりごとの中で肃々とした食事風景が展開される。食

事は禅の修業の一つなので、当然無駄な音声などは一切ご法度である。行為これすべて修行であり、精神をそれに集中せよという、只管打座の考え方から来ている。加えて、太陽、水、土を始めとした自然的要因、料理した人、運んだ人、と食事に関わったすべてのものに感謝しながら食べるべしであった。これは幼い頃から実行してきた実家のやり方をより謹厳に行うものであったから、違和感がなかった。むしろ心地良かった。黙って食べれば食べることに集中し、素材の味もよくわかるし、他の誰彼に気が散ることもない。自然と背筋が伸び、什器はよっぽど大きい皿以外は手に取って胸より上の高さにまで持ち、両肘も持ち上げて顔を俯けずに堂々と前を向いて食べる。この習慣は体が覚えていたので、座禅をやめた結婚後も、長く意識せずともこの姿勢であった。

しかし、禅の一環として禅堂で食事することとは普段は少ない。大方は、座禅が終わった後、控え室に移動し、メンバー全員で食べるが多かった。このときも、和やかではあったが、声があちこち行き交うという事はなかった。自分が食べ終わると、全員が食べ終わるまで両手をひざにじっと待ち、全員が食べ終わった後、それぞれたくわんを一切れずつ食器の中に取り、そこに番茶を注いで食器に付いた飯粒などをたくわんで洗って落とし、最後にはその汁を全部飲んで、什器の内側もきれいにして「ごちそうさま」となる。肉魚のない献立であるし、一汁一菜と漬物という粗食であるが、なぜあんなにおいしく、充実を感じたのだろうか。

さて、三度目の食事場面こそ、私にとって意識の変化を迫るものであった。夫の実家は酒飲みの家である。まず大きな座敷机に男た

ちが陣取り、酒を飲み始める。料理は当然酒の肴になりそうなものが主となる。ここは漁場なので、料理はすべて新鮮な海のもの。飲み、喋り、宴会も始まりそうな頃、ようやく、子供や女たちのご飯や汁物が並び、一時も静かな時間がないほどに誰かが、主に義父が、大声で喋るのである。酒を飲む家と飲まない家の違いに戸惑いながら、料理を作り、運び、何度もグラスを洗っては出すの繰り返しの中で、

「食事中は会話を楽しみながら食べるのが正しい。黙って食べるのは体にも悪いし、陰気で家族間の平和にも悪い」

という、そのころから世間で言われ始めた欧米の方式を真似たにぎやかな食事の在りかたを、近代的であり正しい、と思うようになった。

因みにこの家の訪問客の到来の仕方を述

べると、

「いるかな？」

と大声がしたかと思うと、もう玄関にまで上がってきて、次は座敷に勝手に座っている。女性客も「〇〇ちゃんいるかな？」と声がすると、すでに台所にいる。くったくのないというか、内外うちとそとのけじめのない親密さである。

酒を飲まない家であった実家では、隣の親戚が来ても、まずは時候の挨拶をしてからお茶を出すのが礼儀であった。対する婚家では、お茶を出すと「訪問を歓迎しないから帰れ」という意味だそう。で、男性客の訪問があれば、迷わず酒の類を出さなければならぬ。今のように酒飲み運転がうるさくない頃ではあった。

このような婚家の食環境の中、にぎやかに喋りながら食、べることに慣れ、食事の時間が子供たちとのコミュニケーションを取る場と

なった。世間の風潮も「食事とは会話を楽し  
みながらするのが良い」という考え方に一点  
の曇りもなく同調していったように思う。今  
もそうであると思う。

しかし最近、私自身は、食事しながら会話  
することが苦痛になった。夫婦二人の環境が  
会話を必要としないからであろうか。それと  
も私が幼いころからこのにぎやかな食事形態  
を持たなかったから、老いて子供時代に還る  
の類なのであろうか。食べながらの会話に違  
和感があるのである。もしかすると、こう思  
うようになってからだったのか、人々が無意  
識に片肘をつき食器の中のものはいじくる所  
作や、「おいしい」を連発しながら大騒ぎして  
批評と相槌を繰り返す様子を、寒々しく感じ  
るようになったのは。

勿論、黙って食えることを是とした時代か  
ら、会話しながら食えることを肯定する時代

への食卓のあり方への変化は、楽しく食べる  
ことの発見、人間関係の潤滑油的働きを提供  
すること、食欲のまま腹いっぱい食べること  
の幸福感を得ることなど、日本人の食事への  
堅苦しさを取り除き、料理の発展にも貢献し、  
私たち日本人に様々な恩恵をもたらした。が、  
一方、何か大切なものを置き忘れたような空  
虚感もぬぐえない。

私は、食事はただおいしければ良いという  
のではなく、食事の持つもう一つの側面であ  
る「他の命を自分の命に取り込むこと」を、  
この辺で思い出さなければならぬのではな  
いかと考える。頂くことに対する感謝は、自  
然と食べる行為へと集中させ、素材をじっく  
りと味わい、食物を残さない態度へと向かう  
はずだ。『炉ばたセイ談』八号で宮下亮善師が  
述べておられたように、「テレビを食卓から除  
く」事は、一つの方法であり、食事の時間だ

けでも、計り知れないほどの効果が期待できるように思う。ただ外見的な形だけを言っているのではなく、食べる行為が欲求を満たすためだけのものではないことを思い出したい。少なくとも「食べる」ということにもう少し慎ましやかになりたいものである。「食べる」と「出すこと」は、人間が最後まで残す生理的欲求であるからこそ、「食べる」そのときはなるべく品良くありたいと思う。

昨今、一部の人々に再評価され始めている「糞」。一時、子どもたちを縛る悪の権化のように言われた「糞」は、人間が人間らしくあるためにはむしろ必要なものである、と心ある一部の人々には再認識され始めている。まずは、家庭の食事場面に生かされることを願う。

(エッセイスト)



入院夫妻と著者 平成13年(2001年)2月

(註)二〇一四年六月、故郷の同級生と会う機会があった。玄関口では、お互いワイワイガガヤと賑やかに喋りしていたが、座敷に入った途端に、さっと正座して両手をつき、「こら、お疲れ様でした。ゆくさ帰ってきやした」と正式な挨拶をしたのには、恐れ入ると同時に感動した。自分の気高いルーツを見る思いだった。

## 父親から学んだもの



中西 喜彦

### 一、我が家の略歴

男の子にとって父親との関係は千差万別である。筆者の場合もその中の一つに過ぎないが、喜寿を過ぎた今でも父のことをふっと思い出す。そして、未だに父の物差しで世の中を見ているのではないかと微笑するのである。

父は一人っ子で小学校二年生の時満州で祖父と死別し、母子家庭で帰国し、苦学の末、小学校を出て、小倉商業を中退し、兵役後、昭和三年に二十歳で福岡県巡査として奉職した。終戦時の昭和二十年十月に三十八歳で柳

川警察署長となり八屋、箱崎、東福岡、久留米および八幡の六カ所の警察署長を務めた。

最後を四十七歳で福岡県警刑事部長として勤務し、昭和三十二年三月五十歳で警察功労賞を貰い勇退した。主として戦後の混乱時の福岡県の治安維持に全力を傾けたと思う。

父の人生観として、幼少で祖父と死別したり青年期に病気療養したりした経験から常に生死について考えることが多かったようである。さらに、祖母が熱心な弘法大師の信者であり、どんなに貧乏しても常に感謝した生活をしていたそうである。個人的信仰としては警察講習所時代に講義を受けた駒沢大学の澤木興道禪師に帰依して居り、「衆生本来無一物、吾唯足知」と云うような教えを時々聞かされることがあった。

一方、筆者は昭和十二年二月父が添田署司法主任で三十歳の時生まれた。霊峰英彦山の

麓町である。以後若松、戸畑、福岡と四歳までの間に転居している。筆者にとつての一大事は四歳で母みさおが亡くなったことであつた。丁度県警察学校教官だつた父は母の親戚筋で母の看病の手伝いに来ていた継母ときのと、母の死後一ヶ月目には結婚している。次の年には直方署次席に転勤し、弟和也が生まれた。次の年、県警刑事課次席となり康子が生まれた。官舎が西公園にあり、筆者はここで当仁小学校一年生となつた。その後、柳川で和夫、箱崎で達夫が生まれ、四人の弟妹が出来た。

## 二、筆者の過ごした思春期とその後

筆者の中学、高校時代は敗戦後十年間と重っている。その間父は警察署長として公務に忙しく、子供の相手等なかなか難しいことだつた。学校の転校事務なども部下の人に付き添つてもらうような状況であつた。当時、継

母も二十二歳で結婚し、いきなり四歳の子供（筆者）が出来、一年後には長男が生まれ、ほぼ二年間隔で長女、二男、三男と生まれている。家庭では五人の子供の母、対外的には警察署長の妻として大変な時代だつた。父は祖父と早く死別しており、兄弟もなく、身近に子供を教育するモデルが無かつたようである。

筆者が父親に拘るのは、小学校から高校までの間は父親しか身近に参考になる例がなかつたことがある。当仁小学校を皮切りに一貴山、柳川、八屋、箱崎と転校した。福岡学芸大附属中、久留米城南中を経て、明善高校に入學し、八幡高校に転校して卒業した。何しろ普通は小中高と三回学校を変われば良いところを、九回変わり、さらに小学校では空襲後の疎開で親元を離れ、中学校や高校では転校だけでなく親の転勤の時期で下宿生活もす

ることになった。先生や友達が出来ても父の転勤でお別れと云うことである。おまけに親元に居る時は署長官舎のため、警察署の横に併置され、町の中心地にあり、近所に友達を作る機会が少なかった。また、当時署長官舎は十七時以降の応接間見たいなもので新聞記者の夜討ち朝駆けの訪問をはじめ多くの客でにぎわった。母が接客で忙しい時は弟や妹に夕食を食べさせたりして忙しい時期だった。

丁度中学二年で福岡市西公園にあった附属中から久留米の城南中学に転校したのであるが、ぼつぼつ進学を考える時期になった。

一方、丁度中学生から高校生の時期は、父は激務であり、警察などへの襲撃事件のようなものもあり、まず、「自分が死んだら長男の君に宜しく」という父の言葉があった。どうすれば自分で食べる様になるかと云う焦りがあった。当時、父は敗戦の原因を明治の元勳達

のように実務で苦勞した人でなく、陸海軍の大学や帝大卒の人達の空論の暴走により、生じたと考えていた。簡単に云えば戦線を広げ過ぎたとのことであつた。そこで、自分の若い時の経験から実務的なもので苦勞しないと本当の人生は分らないと云う考えだった。

そこで、君はどこか商店の丁稚奉公からでも始めて社会の実態を良く知ってから社会に出た方がよい。久留米商業等の実業高校で実学の基礎をどう身につけるかと云うことになった。当時は中卒で就職する人も多く、また、当時の小生の心配は万一に備えて如何に自立して食べるかと云うことだった。それは父が死んだらどう対応するかと云うことでもあつた。幸いにして父が存命だったので取りあえず、普通高校の明善高校に入学した。その後前述のように八幡に移り、福岡で一浪して、鶏でも飼つて静かな生活を夢見て農学部に入

学した。

自分の転々とした経験から流石に警察官には気が向かなかった。もつとも大変大切な仕事と云うことは身にしみている。卒業後、九州大学大学院に入学し、博士課程三年の昭和三十九年五月に鹿児島大学農学部に助手として就職した。約二十八年間一カ所で勤務し、平成十四年三月に教授として退官し、現在に至って居る。警察署長と大学教授と云うと余り共通の価値観を得られないような気がするが、未だに父の価値観を超えられない気がする。

### 三、退職後の父の動向と最期の会話

父は警察退職後、郷里芦屋に開設されたモニターボート競争会の総務委員、その後福岡那の津に倉庫会社を設立し、常務や専務を七十八歳まで勤めた。七十七歳の時福岡県警友会副会長となり八十一歳で同会長となり一

期二年勤めた。その後町内会の世話役となり、八十五歳の敬老の日の祝賀行事をお世話して、帰宅して夜息を引き取った。大した病氣もしていなかったので検視では心不全と云うことだった。我が親ながら見事な最期だと思った。

筆者は二十七歳の時に自宅通学だった九大大学院博士課程を中退して、家を出て就職して以来何度も父と会った訳でもない。虫の知らせ等と云うものではなかったが、めつたに会っていないので、一度ご機嫌伺いと、五十五歳の時丁度オランダの学会に行く時に、福岡経由の便で往復したので、家内同伴で自宅を訪問した。二回も亡くなる二週間程前にゆっくり疑問点を聞くことが出来た。往路は母の手料理で、帰路は近くの寿司屋に行つて結構遅くまで飲んでいた。家内の後日評ではお父さんはしゃんと歩いてるのに貴方はふらふらしてだらしないとのことであった。

帰宅後さらに一升瓶から清酒にぬる燗を付けながら午前二時頃まで飲みながらの話である。二つだけ記憶に残っている。一つ目の子供の教育については「なるべく苦勞させようと考へたらしい」。もう一つは長生きの秘訣についてである。「しばらく考へてから、どうも怒らないことかもしれない。怒りやすい人の順に死んでいるような気がする」とのことであった。今でも良い遺言だと多としてゐる。

#### 四、父の価値観と教育方針

早いもので父と別れて、後二年で二十五回忌を迎える。改めて親子の共通の価値観として遺伝子の半分は同じであると考えられる様になった。父がある時自分は若い時どんなにぐれでも可笑しくない環境を経験したが、全くぐれる考へがなかった。これは全てご先祖のお陰であると云っていた。父の先祖は福岡県遠賀郡芦屋に数百年住んでいた「道行き商人」

だったようである。江戸時代は加賀藩に焼物を納めていたらしい。商いと云うのは相手の事情を良く理解して行わないと成立たない。結局警察官も大学教官も「道行き商人」の末裔が食べる為の狎れの果てと考へるのが一番理解しやすいようである。

言い換えると「我が身をつねって他人の痛さを知れ」と云うように、「苦勞しなければ他人の事情は分らない」と云うようなことを考へていたのではなからうか。丁度父が活躍した戦後十年間は占領軍の支配、在日外国人問題、労働争議あるいは水平社運動等の新しい治安対策が求められる状況の中でその調整能力が求められ、現世的名譽や利害を超越した考へが役立ったのだと思う。

父の思想は主に昭和時代の思想家、陽明学者安岡正篤に帰依していた。「国体の維持・平天下、治国、齋家、修身、正心、誠意、致格

知物」ということである。生活態度としては「教育勅語…父母に孝、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じ」に準ずると云う考えであった。また、般若心経を仏壇に向かって良く唱えていた。これらのことから学んだのは、天皇制のもとでの公と私、私を律する仏教の教えということである。また、祖父や筆者の母との早い時期の死別から、人は必ず死ぬものである、死ぬ時には何も持つて行けない、結局人は生まれて来た時から目の前ことに善を尽くすことしかないと思つたのである。

しかし、筆者の中学・高校時代は目の前に目標を掲げるには具体例が少なく父は「署長より巡査の時が楽しかった」などと云つてゐるのを見ると、色々な組織の長になることも魅力的には見えなかった。そんなことで筆者は今でも生き方や人生の目標を模索している。

そのような中で父からの最期の遺言に「子

供には出来るだけ苦勞をさせたかった」と「長生きの秘訣は怒らないこと」と云うことを考へてみた。最初の考えは般若心経で云う「色即是空、空即是色」と云う考えに辿り着いた。

六号で紹介した世阿弥の演技論における般若心経の引用を、人生に置き換えてみた。生まれて死ぬまで色々と演技をしながら生きて行く訳である。そうすると演能と観客との関係のように、目の前に色々な事象が現れる訳である。人間関係、社会構造などその背後にある目に見えないものをどれだけ見通すかということは感受性の高い時の苦勞に他ならないと思うのである。父はその基礎知識を得るための丁稚奉公説があつたのだろうと理解している。

長寿の秘訣については筆者の経験からも領けるものがある。医学・栄養学などの発展により感染症系の病気が少なくなると、生活

習慣病と称する脳血管系の病気が大きな比重を占めて来る。同じ事象でも攻撃的に対応することは相手も傷つけるが自分も傷つけることになると思われる。

## 五、親子の歩みを比較してみると

父の警察署長としての資質が十二年間に



現在の心構えを絵にしたもの。ミニブタは筆者最期の研究対象。金剛杖は同行二人と弘法大師を意味する。弘法大師に加え、筆者は父親とその遺伝子を導師と考える。(田中咲子・画)

七カ所も栄転の形で転任するほどとび抜けて優れていたか分らない。しかし、元々の公正感と先祖伝来の商人的バランス感が遺伝子に組込まれていて、かつ、幼少時の苦労から得られた経験が敗戦後の混乱期の治安維持に必要とされたのではないかと考える。

それは筆者についても同様である。研究者の素質に必要な精密さなど不足しているのではないかと思う。また、転校も多く基礎学力も高くない。しかし、沢山の学校を転校し、警察署長官舎に集まる各界の人々の在り方をみた経験が、実社会で役立つたと思う。

長線にあったと考えている。

## 六、おわりに

父の行動様式は公私の別をはっきりして、「利己心を脱落して、誠心誠意現在の仕事に打ち込むこと」としていた。しかし、「利己心」と云うのは突き詰めると、自己保存欲である食欲、性欲、名誉欲、知識欲や金銭欲というようなものでこれが無くなると人間でなくなるのではないかと思うのである。しかし、自分の現状は未だに「大学の為とか、人の為とか」父由来の概念がつきまとって困っている。欧米の状況をみると利己心を華昇して成果を得ている節がある。喜寿を迎えた今「利己心を脱落して」ではなく「利己心を華昇」させてみたらどうなるかと思うのである。所謂欧米型の弱肉強食の世界であり、牧畜文化の國の論理である。

丁度。筆者の就職した昭和三十九年五月は新しい農学部を指して旧来の農学科の一部や蚕系学科および総合農学科を解体して新しい畜産学科を前年に設置した時期だった。以来本誌八号や九号でも紹介したように附属牧場の建設、動物飼育棟の建設、学科棟や研究設備の充実に努めた。それをもとに研究成果も出すことが出来た。それぞれ歴史をもつ六研究室の事情を良く理解し、助け合う体制を作ったと自負している。また、人材育成で基礎学の自主ゼミ、研究室内での英会話ゼミの開設、旅行や宴会など学科内の融和などで、学科の充実につとめた。畜産学科第一回生から医学部以外では初めて、昨年四月に自前の鹿児島大学学長前田芳實氏の実現をみたことは、研究面だけでなく、教育面でも恩師西山久吉教授構想を実現したものと考えている。それは父の考えの「利己心を脱落して」の延

現在の世相をみると公私の別が曖昧にな

って来た。さらに国際化が進むと、なおのこ  
と行動基準が異なってくる。韓国のセオル号  
沈没事故を見ると日本で考える公私の概念で  
は判断出来ないことに驚いた。その場その場  
での該当者の利益が優先されるため、何が正  
義なのか分からなくなっている。中国の共産  
党や人民軍の在り方あるいは北朝鮮の肅正騷  
動は国民国家としては理解できない。百年前  
の馬賊国家そのものである。中東紛争、ウク  
ライナ情勢などアメリカの存在力の低下とと  
もに将に天下動乱の時期にさしかかった。

ここで貞子さんの業績を思い出すのであ  
る。朝河博士の incoming 文書の一つのポイント、  
ヨーロッパと我国の封建制の違いに辿り着く  
前者の「権利と義務と云う契約にもとづく封  
建制」と「武士の忠誠心と農民の従順さによ  
る相対的経済の平等性」の思想は今に至るま  
で流れている。さらに、七回に及ぶ incoming 新能

で当時の有様を紹介している。例えば第四回  
の新能では川内川周辺を舞台にした能「鳥追  
舟」を上演し、記念像まで作って居られる。

この中に國の有り様、親子、奉公人などの状  
況が紹介されている。即ち、中世武家社会の  
原型を身近に知ることが出来ることである。

馬淵睦夫・渡部昇一著「日本の敵」(飛鳥  
新社)の中で今後の世界の動きをグローバリ  
ズムとナショナリズムで対峙させている。日  
本や現在のロシアはナショナリズムの國。ア  
メリカ、中国、イギリスなどはグローバリズ  
ムの國と述べている。その原型が incoming 文書に  
説明されているように思われる。

(鹿児島大学名誉教授)



## セイシはセイシ

澁谷 繁樹



入来とのつき合いは、二十代で当時の南日本新聞社川内支社に赴任して以来だから、もう四十年になる。営業運転を開始しようとしていた川内原子力発電所の担当記者としての北薩回りだったけれど、名字が名字で親近感を持たれたのだろう、入来の県議会議員、町長、郷土史家とウマが合い、雪、桜、蛍とそれぞれ季節に見送られ、ほろ酔いだったり前後不覚だったりしながら、川内のアパートまで帰る夜が続いた。

郷土史家が主催する入来文書の講話会ものぞいたのに、結局モノにならず、主催者から「アナタが一番、知っておかないといけない

んですよ」とシツタされた。反省して努めればいいものの、つい口ごたえしてしまう。「だいたいにしてから、歴史つてのは、権力を持つ側が自分の都合に合わせて書いたもんじゃないんでしようか。セイシはセイシだから、所詮、男のキレイゴトに過ぎないという歴史学者もいますし」

セイシはセイシ、は、正史は精子、になる。どこかで聞きかじったか、読み拾いしたに違いない気の利いたセリフをつぶやくと、謹厳実直な郷土史家は「これだから、新聞記者は」と、さっさとサジをはるか遠くに投げてくれた。

ホントカイナと眉に唾を塗るのは、新聞記者として悪い心がけではない。「ゆきくれてきのしたやみをやどとせばはなやこよいのあるじならまし」。いい歌だな、と感心する。現代の家なきオジサンたちが口にも上しても似合う、

時代を超えた傑作をつくったのは、薩摩守平忠度。源平合戦の一環で追いつめられた際にしたためた、まではいいとしても、殺害した側が検分中に鎧の下から発見して落涙した、となると、ふうん、なるほどねえ、と指を舌にやりそうになる。

そもそもカミサマたちが寄ってたかってつくった国だから、一首の情趣あふれる誕生日語にイチャモンをつける気はない。ないけれども、首は傾げてみる。目つきが悪いと言われようが、そうそう簡単に納得しては、仕事がすたる。江戸幕府は、なにかといっちゃ、薩摩藩をつぶそうとした、と講釈を受けても、せつかく南の未開地を治めてくれているのに、わざわざ面倒なお取りつぶしを考えますかね、と頭は回る。

強すぎるのも困るが弱すぎるのも厄介くらいのところ、マアマアアアと中央と周

辺が折り合いをつけていくのが幕藩体制ではなかったかくらいの視線で書いた記事も書いている。

「薩摩大隅鹿兒島表高七十二万八千石自体が侍だらけの藩だった。一八七一（明治四）年の記録を見ると、薩摩の士族の人口に対する割合は二割六分に達している。

士族を簡単に説明すれば、平民（一般の人）と華族の中間の身分を指す。華族とはなにか、天皇以外の天皇の家族他親類を表す皇族（皇后や親王など）と士族の中間、一七八四（明治十七）年の法律で公爵や伯爵など爵位の称号をもらった人たち（明治維新の功労者など）になる。一九四七（昭和二十二年）廃止。士はさむらいとも読む。「昔はそれなりの武士」だった家系が士族と考えればいい。

全国の士族率は6%前後、薩摩の26%は群を抜く。

住民の四人に一人が侍関係とは多すぎないか、加えて幕府の政策は「二つの国には一つの城」なのに、薩摩は藩内をほぼ百十の地域に分け（外城）、それぞれ役人（外城衆中）が常駐して治めている、現実には城があるわけではないにせよ実質は城を百十構えた行政形態じゃないか。

いっばいいる侍がひよつとして攻めて来てもしたら大変とでも考えたのだろうか、一六三三（寛永十）年、薩摩の一般情勢を調査に出張してきた幕府の役人が、薩摩の家老に聞く。「ちよつとお侍さんがいすぎませんかねえ」。家老は、頭をかきかき答える。

『いやあ、それが、あなたが、なにせ最盛期には九州を一手に握ろうとした藩ですから、雇い入れた武士がはんばの数じゃなくて、鶴丸城下は土地が狭いし、役人の分散居住は仕方ないですよ。各地にある城みたいな立派

な役人の屋敷ですか、あれはそれ、ご案内の通り、当地はシラス土壌で、家をつぶすとなったら土地も崩れるかもしれないから、壊すに壊せずに』

さすがに大きな藩の家老ともなると一筋縄ではいかない。質問した幕府の役人は苦虫をかみつぶした顔のまま江戸に帰っていったろう。薩摩の家老は、一門家（越前、加治木、垂水、和泉四家）、一所持、一所持格（日置、北郷、川上など四十二家）、寄合（二階堂、義岡、平田など五十四家）の計百家の出身者のなかから選ばれる（二〇〇四年三月九日付南日本新聞「宝暦治水250年 薩摩義士たり語りから抜粋」）

連載九十回をほぼ同じ目線で書き進めたけれども、イチャモンはつかなかった。歴史物は一言居士が多いから文句を言われても待ち構えていたのに拍子抜け、史料をよく読み

込んでいるとのオホメを頂いたりして、付け焼き刃記者は隠れる穴を探しまくったりしたのを思い出す。

入来についても歴史物語をとの依頼を何回も受けて、そのたびにはぐらかしている。最近「イリキインテイコサンが書き尽くしているじゃないですか」を、言い訳にしている。天国に行っても大学の先輩はありがたい。人格識見はるかに遠く及ばない後輩は、先輩が残した書を指折りながら、不埒にも原稿を断る口実になっている。その度に「シブヤチャン、アノネエ」とオチョボグチのお小言が聞こえないでもないけれども、センパイねえ、だいたい、アナタがいけないですよ、仕事を抱えすぎるから、人生をあんまし急ぎすぎるから、ソウデシヨ。

（鹿児島県NIE教育に新聞を推進協議会事務局長）



新平和同願観音菩薩像（平成8年4月建立）

渋谷五族下向750年、終戦50年記念事業として、入来院氏の菩提寺であった寿昌寺跡（薩摩川内市入来町）に建立された。

## 時の過ぎゆくままに (4)

おじいさんになって死ぬる幸せ



桐野 三郎

## ※ 災いを転じて福となす

古い話だが社会奉仕団体Rクラブの国際大会が指宿市で開催された。国内はもとより海外からの来賓も多数招いての大会だけに、地元クラブの受け入れ準備は万全を期して周到に進められた。大会は好評のうちに幕を明け大成功を予感させてまずは午前中を終わった。が、思わぬ大失態に気づいたのがすぐその後の昼食時間だった。

何せ多人数の大会、昼食会場は近辺の体育館や学校の校堂など数か所に分散して準備、食事中は遠来の客をもてなすために地元各種

団体の歌や踊りを披露しようという趣向。そしてそれも一見好評裡に終わったように見えた。だが、地雷が埋めこまれていたのはその郷土芸能を解説するために配られたチラシだった。

「この踊りは朝鮮征伐のときの勇壮な踊り」いや、正確には記憶していないがそんな意味の一行がチラシの中にあつたのだ。来賓の中にはもちろん韓国からのメンバーも多い。招いておいてそんな踊りを披露するとはとんでもない非礼だろう。気付いた事務局は慌てた。

だが、午後の開会冒頭で陳謝の挨拶に立った大会責任者の言葉は率直で誠意の溢れたものだった。これも詳細はもう覚えていないが、僕が紳士として尊敬する先輩の言葉だっただけに「さすが！」と感服したことをはっきり覚えていて。でも実は、それ以上に会場の空

気を爽やかなものに変えたのが答札に立った韓国側代表の、これまた率直な言葉だった。

「いや、私たち韓国人だつて日本人の悪口をずい分言つてきましたよ。日本人が我々のことを『朝鮮。ピー』と呼んだようにね。そんな怨みや憎しみはまだ少しは残っているのかもしれない。だが私たちの子供や孫の時代にはそんな憎しみを残してはいけない。そのためにお互いに努力するのが私たちの役目でしょう」

たしかそんな内容だった。考えようによっては取り返しのつかない大失態ともいえるトラブが、双方の紳士的な応酬によってみごとに氷解した一幕である。いや、氷解したばかりではない。このやりとりを機に会議場の空気が一変。打ち解けた和やかなものになったのだ。率直な応酬が絆を深めたといつてもいいだろう。その後二、三日続いた会議でも

固苦しさが一挙に取り払われて大会はめでたく幕を閉じたのだ。災いを転じて福となした好例だろう。

ところで、という三十年も昔のことを何故いまごろになつて鮮明に思い出したか―だが、孫の時代はともかくもうすでに子供の時代は到来しているのに、日韓関係はもちろん、日中関係もあの紳士的な双方の願望とはまるで反対の方に推移している皮肉な現状に呆れるからだ。こと政治ともなれば紳士的にといいわけにはいかないのだろうか？ ぼくは政治家の資質のほうにも問題大有りだと思ふのが。

### ※ 戦争の恐怖初体験

戦中派（といわれる世代）である。ちよつと遅れて生まれてきたお蔭で戦場に狩り出されることは免れたが、戦争を間近に見、聞き、

感じてきた世代（生まれた年の満州事変に始まり支那事変、二次大戦と中2まで）ともいえる。戦争の愚かさについてはすでに有り余るほどの記録が残され、数えきれないほどの検証や証言がなされてきたことは衆知の事実。でもやはりあの激動の渦中で死すら覚悟せざるを得ない体験を経てきた一人として「これだけは書き遺しておきたいと思っっていることの一つや二つは僕にもあるのだ。書き遺すというには僕はまだ若過ぎるかもしれないが〈炬ばたセイ談〉が記念すべき10号と聞いて紙面をお借りする気になった次第。しばしおつき合い頂ければ有り難い。

絵が好きな子供だった。小学校に上がる前から描いていたが描くのは飛行機や軍艦ばかり。支那大陸で日本軍は連戦連勝を続けていた時代だから、僕はすでに軍国少年ならぬ軍国坊やだった。それでも生々しい戦争体験を

聞いたのは小学3年生からだ。陸軍の戦車隊長で少佐だった富重のおじさんが退役（負傷のためだったか？）して、道路向かいの屋敷に帰還してきたのだ。その屋敷でもだが、夏の夜など道ばたに並べた涼み台に、近所の人たちが毎晩のように集っては富重少佐の武勇談を聞くのを楽しみにしていた。支那軍を蹴散らして進撃する戦車隊の活躍ふりは何度聞いても胸躍るのだが、僕にとっては唯一つ、今思い出してもぞつとする恐ろしい話があった。日本刀でチャンコロの首を切らせた話だ。「チャンコロ」とは朝鮮人に対する「朝鮮ヒ」と同様に、当時の支那人に対する蔑称である。戦場で捕虜にした支那人の何人かを、戦闘に不馴れな新兵たちに度胸をつけさせるために殺させたというのだ。まず彼らにスコップで溝を掘らせ、そのあと後手に縛り上げた上に目隠しをして坐らせる。そして後から

首を斬り落とさせ、死体は溝に投げ込んで埋めさせたという話。もちろん日本刀の所持を許されたのは将校以上だけ、ということはつまり富重さんちの床の間に飾られていた日本刀は何人も支那人の首を斬り落とした刀だったというわけだ。

世はすでに国民皆兵、望むと望まないに拘らず健康な男児なら誰しもいずれは兵役に召集される。小3の僕にもその辺の覚悟はどうにかできている。戦場に行けば撃つ、撃たれる、斬り斬られるで結果、戦死ということも当然想像する。だがそれは無我夢中の戦闘の最中、恐怖を感じるとまもないだろう。でも軍隊に入るとは、身動きできない無抵抗のチャンコロの首を日本刀で斬り落とす、そんな命令にまで従わなければならぬのか？ 「俺にはとてもそんなことは出来そうもない」と、僕はひそかに恐怖におののいた。

わが家にも三振りの日本刀があった。夜遅く床の間に正座しながら父が手入れしている姿を見受けるものだった。僕も何度か持たせてもらったことがある。ずしりとくる重みもだが、鋭い刀身や鋭利な剣先など眺めていると、子供心にもどこか引き込まれるような妖気とでもいうような何かを感じるものだった。しかし、富重のおじさんの首切りの話を聞いてから、僕は日本刀を見るのも嫌になった。



### ※ 死ななければならぬ不条理との対峙

小3からは学校帰りに共学舎（鹿児島市にあった郷中教育舎の一つ）に通い相撲、水泳、詩吟等に親しみ、義心伝や妙田寺参りや曾我どんの傘焼きで勇壮な気概を養い、さらに小4からは海洋少年団員に選ばれて水泳やカッ

ターの漕艇訓練ばかりか、手旗信号やモールス信号までマスターして、軍国坊やの僕は順調に軍国少年に成長。小4の十二月に勃発した太平洋戦争で日本が連戦連勝を続けた時期には、聞きしに優る日本軍の強さに驚喜したものだ。

入った中学校は軍神横山少佐を生んで映画の舞台にもなった名門高(自称の?)。海兵(海軍兵学校)や陸士(陸軍士官学校)などへの合格率も高く、勉学もだが軍事教練なども徹底していた。配属将校以下旧軍人が数名、殊に僕らの教練を担当した陸軍准尉(元)のしごきの凄さは後々まで語り草になったほどだ。だが、中学に入った昭和十九年にはすでに戦況は彼我逆転、日本不利になっていたのだろう。「この戦争はどうやら負け戦だ」と言い出した町内会長をしていた自分の父親と、むきになって喧嘩をした記憶がある。「何をバカ

な!そんなことを言いだす人間を非国民と言うんだよ!」などと。しかしその年も後半に入る頃には「親父が言うのがどうやら本当かもしれない」と、内心ひそかに考えるようになっていた。サイパンやアッツ島での玉砕の報が次々と耳に入るようになったからだ。

日本の敗戦をはっきり予感しはじめたのは中2(昭和二十年)の春からだ。鹿児島市が四月の騎射場方面を皮切りに、平之町、上町方面を次々に空爆に晒され、極めつけが六月十七日の大空襲。一夜にして鹿児島市は見事なまでの焼野原と化した。鴨池の飛行場から迎撃のために飛び立つゼロ戦の機影などすでになく、制空権は完全に米軍の手に落ちた。鹿児島島の青い夏空を、グラマンやロッキードP-38がわが物顔で飛び交っていた。

だが、書き遺したいのはそんな戦争の経過ではない。その経過につれて追いつめられて

いった、中2だった僕の心境の推移だ。

中学校に入ったところから自分の進路は決めていた。中学四年を経て海兵に進学と。格別愛国心に燃えていたわけではない。軍人を志す志さないに拘らずいずれは兵役に狩り出される国民皆兵の時代。ならば最初から軍人学校を経て早く将校に昇進したほうが有利。それもだが、何よりも海兵の腰に短剣を吊した正服姿がカッコ良かった。そこら辺が海兵と決めこんだ子供っぽい理由だったような気がする。

だけど戦況が緊迫してくる十九年後半ともなれば「そのうち海兵だつて繰り上げ卒業になつて前線に狩り出されるかもしれない。そして特攻隊に組み入れられたとしたら・・・」などと、自分の死がかなり差し迫ってきたような気になつてくる。入学した頃は、海兵を卒業して少尉に任官、前線に出撃して運悪く

〔戦死〕という人生で終わつたとしてもそれは三十歳前後、漠然とだがそれぐらいの人生を思い描いていたのだ。それが敗色濃厚となつた二十年春には「いや、下手をすると俺の人生も二十歳そこそこで特攻機で敵艦に突入して一巻の終わりーということになるのでは？」そんな焦りと不安に襲われる夜が続くようになっていく。昼間は消火訓練だの焼け跡整理の動員に追われて考える暇などないが、夜布団に入つてから（自宅は唐湊の山裾にあつて焼け残つた）徐々に切迫してくる自分の「死」を考えはじめたのだ。

現在流の満で数えればまだ十四歳にもなつていないが思春期は始まつていた。隣家の一コ年上の女学生に淡い恋心は抱いていても、まだ恋を語る術も知らなければ余裕もない。「俺は遂に異性も知らずに死んで行かなければならないのか・・・」と、やり場のない煩

悶に襲われるのだった。

しかしそれも、鹿児島市が焼野原になり、次いで沖繩全滅の報が流れるころにはほとんど絶望に近づいていく。沖繩の次はいよいよ本土決戦、米軍の上陸地点はどうやら志布志方面らしい。空からの特攻作戦などできるはずがない。そんな飛行機など日本には残っていないのだ。志布志方面から押し寄せてくるであろう敵の戦車の下に、爆弾を抱えてもぐり込んで自爆。中学二年生の僕らに残された死に様はそれぐらいしか考えられない。しかもその時期の到来は遅くとも一、二ヶ月後。いや、早ければ来週にもだ。という自分の最期は何度考え直してみても、九十九パーセント動かしようのない当然の帰結として夜な夜な襲いかかってくるのだ。わずか十四歳そこそこで自ら死地に飛び込んで行かなければならない、そんな自分の運命を考えてはひそか

に涙した日々が僕にもあったのである。

### ※ 突如として訪れた青天の霹靂<sup>（まれき）</sup>

連日のように敵機の飛来する鹿児島市から逃げるようにして、兄と共に牧園町の三体堂に疎開したのは七月に入ってからだった。先に疎開していた両親や妹たちと合流して祖母宅での賑やかな暮しが再開。緊迫した戦局に変わりはないものの鹿児島市とは様変わり、農家の主婦たちが戦争のさ中だというのに田の草取りに精出している風景などどこか長閑で、荒んだ僕の気持ちをしばし和ませてくれた。ひと月そこそこの期間だったが田舎の婦人たちは優しく美しく（そう見えたのは僕が思春期だったせい？）きれいな川では水泳を楽しむことも出来たのだ。という束の間の、命の洗濯のような疎開だった。

ラジオで重大ニュースが発表されるとい

八月十五日に、部落の人たち十数人といつしよに集つたのはすぐ隣の親戚宅。正午に発表された天皇の紹勅は雑音ばかりで何のことやらさっぱり聞き取れないが、前後の事情がある程度分かっていた役場勤めのおじさんの解説で、どうやら日本が戦争に負けたらしいことが徐々に解つてくる。とはいえ一億総玉碎という覚悟を押しつけられていた当時の日本人にとつて〈降伏〉とはとても信じ難い現実。

次々に疑問や質問が飛び交い騒然となった。「米軍はいつ現れるんだ」「我々はどんな目に遭わされるんだろう?」「若い女性は皆連れ去られるのではないだろうか」などと。

もちろん僕にとつても日本の敗北、いや、降伏は青天の霹靂。不条理な自分の運命を呪い続けた日々があればどあつたというのに、まさか日本が降伏することがあるうなどと  
は・・・。

「だが、若しかしたら俺はこれで死なずに済むのではないか? いや、勝ち誇つた米軍に酷い仕打ちを受けるかもしれないがそんなことなどどうでもいい。十四歳で死なずにすむなら何だつて我慢できるさ」

事情が呑み込めるにつれて僕は徐々に、腹の底から嬉しさがこみ上げてくるのだが、心配ごとを口々に議論し合っている大人たちの前で笑い出すわけにはいかない。ひとりその場を抜けて田圃の中の一本道を川に向かった。集落の人々は皆ラジオに釘づけになっていたのだろう。異様なまでに静かな緑一色の村の中を、僕は夢を見ているような気持で歩いていた。橋の手前を川沿いに少し上ったところに僕らの遊び場があつた。水泳をするというには恥ずかしくなるぐらいの広さだが小さな滝壺になっている一画。いつもは飛び込み台代りの岩に腰をおろし、僕はつい先刻起こつ

たばかりの奇跡をゆつくりと反芻していた。沸々と湧き上がってくる喜びを噛みしめながらだ。清冽な流れの上を無数のとんぼが飛んでいた。



### ※ 鬼畜と恐れられた米兵たちの実像

米占領軍（約一千名）が鹿児島市に進駐してきたのは敗戦後二ヶ月を経た十月中旬だが、彼らが宿営地を選んだのがなんとぼくらの中学校。焼野原となった市中にもはや彼らを受け入れるほどの建築物がほかに残っていないかったというのが率直な理由だろう。だがその校舎（鉄筋三階建）だって生徒たちが泊り込みで防空当番に当り、米軍の焼夷弾から必死に守り抜いた建物、六月の大空襲の夜など幾人もの焼死体まで運びこまれたことなど考えると、やはり敗戦という歴史の皮肉を実感し

ないわけにはいかなかった。

連日米兵たちは入居準備で汗水たらして働き、僕たち学生は伊敷の陸軍兵営跡に移転するため、午前、午後の二回机や椅子などの荷物運びで往復するのだが、その作業が終わるまでの二週間が、僕らの学校で米兵たちといわば同居—という形で過した期間だ。当然接触もあれば交流もおこる。そしてその全てが新鮮な驚きの連続。現代流いまに言えばカルチャーショック。しかもそのショックはあの敗戦の日、田舎のラジオの前でみんなが並べ立てた不安とはおよそ真逆の、明るい笑いに満ちていたという意味ではこれまた青天の霹靂といってもよかった。

和式トイレの上に〈屈む〉という姿勢が取れない米兵たちが、真っ先にした仕事が校庭のまん中を掘り起こしてバラックのトイレを造る作業だったこと。それを見て学生たちが

笑いころげた話などはたしか本誌（8号）に書いた記憶があるから省略するが、いま思い返してみても、たった二ヶ月前までは迫りくる玉砕という運命に脅え（おそ）えていた学生たちが、晴れわたった秋空の下で敵兵たちを見て笑いころげた記憶は鮮明だ。あれは長い長い軍国主義というトンネルからやっと抜け出したという開放感、さらには「鬼畜米英」と聞かされ続けた米兵たちの実像に接してみれば、なんと明るく陽気な若きヤンキーたち。敗戦国の僕らを使役にこき使うどころか自分たちの便所造りに汗水流しているのだ。そんな思いも寄らぬ安堵感の発露でもあったのだろう。

移転作業が終わって僕らが母校を後にするころには、校門の周辺にはもうガムやチョコレートをねだる子供たちが群がり、半分顔を隠すようにスカーフで頭を覆ったご婦人たちが

もちらほらと出没するようになっていた。だが、彼女たちが後にPANPANと呼ばれるようになる娼婦たちだとは、僕はまだ気づいていなかった。

### ※ 混乱の中での戦後の始まり

伊敷兵営跡での一年間は混沌の中での一年だった。陸軍では最強を誇ったという四十五連隊（のち十八部隊）兵舎も敗戦三ヶ月後の十一月ともなれば荒れ放題の藻抜きの殻。その兵舎跡に中学校二校に専門学校（工専）一校、計三校ひしめき合っただけの授業だ。窓のない廊下越しに反対側の教室の授業も丸見えなら、声まで聞こえてくるというお粗末さ。その上、これまでの教育は軍国主義だったという理由で殆どがアウト。即刻民主主義教育にあらためろーで教育現場はテンヤワンヤの時代。どんな教材を使って何を学んだかなんて

記憶にほとんど残っていない。覚えてるのは蚤や虱がまだ教室に残っていたこと、生徒たちはほとんどが空腹のために早飯はあめし（午前中の休憩時間に食べる）をしていたこと、勉強のほかに作業（荒れた兵営跡地の整理など）の時間が多かったことぐらいのものだが、その兵営跡の片隅に、もう教えることのなくなった元陸軍准尉殿が悄然と立ち竦む姿を幾度も見かけたことだけは、いまでも眼底に焼き付いている。

だがそんなうらぶれた学校の授業なんかどうでもいい。時代は変わったのだ。がんじがらめに縛られていた軍国主義から一挙に解放され、民主主義、自由主義、個人主義などと次々に注ぎこまれる新しい概念にわけも分らず舞い上った僕たちは、ひたすら遊び回ることとに忙しかった。鹿児島市の光景も一変した。戦争に負けたというのに市民のエネルギ

ーというか底力というか、焼け跡には次々に掘立小屋が出現し、易居町や名山堀、西駅（いまの中央駅）周辺には次々と闇市が出現して賑わいを見せていく。そればかりか街中には米兵たちのジープが走り回り、主要な交差点にMPやSPの腕章をつけ頭にはヘルメット、腰に拳銃と警棒を吊した憲兵が立ち、非番の米兵たちが昼間から娼婦たちと腕を組んで街を往くという、いわゆる戦後風景がまたたく間に出現していった。

唐湊の自宅から伊敷の兵営跡までは一時間以上もかかる通学路、朝は合流した仲間たちと登校を急ぐが帰りは三々五々、気の合った者同士で遊び歩くのが楽しかった。今なお忘れられない記憶を二つ。

横川出身で下荒田に下宿していた親友に実家から白米一升が送ってきたとき、その一升を甲突川べりの草むらの中で飯いこうで炊いて

仲間四人で食べた。おかずはたしかたくあんの数きれずだった。だが、生涯の中で一番旨かった食べ物は一と問われれば、やはりあの時の銀シャリの味と答えるだろう。「ハングリーズ・ザ・ベストソース」という格言もだが、食べ物も酒といっしょでやはり誰と、どういう状況で食べるかが重要な要因だろう。その頃僕にとつても生涯の友情が芽生えた年頃でもあったのだ。

いま一つは鮮明なカルチャーショック。びしっと糊のりの利いた制服を着た米兵たちが、派手なスカーフや服を身にまとった娼婦たちと昼間から堂々と腕を組んで、誰はばかるとなくあちこちを散策している光景は（今までと何もかも違う）という時代の転換を、僕たちの目にくつきりとインプットしてくれたという意味で忘れ難い。

さらに言えば、俗にはパンパンと呼び捨て

にされていた娼婦たちだが、僕にとっては女という性の深淵を覗いた最初の経験だったよ  
うな、どこか懐かしい思いで振り返ることがある。進駐してくる米兵たちから如何なる仕打ちを受けるか、日本中の男たちがびくびくしていたあの時期に、米軍が出現するや否や、わずか数日にして姿を見せた女たち。そんな女の性まぶを語るとき、男たちはややもすれば「男は頭でものを考えるが女は子宮でものを考えるのさ」とか、「人類が最初に始めた商売は売春だったというからな」などと薄っぺらなジュークでごまかすことが多いが、あの当時の光景を知るばくは、いまだに「娼婦はより神に近い」という言葉に説得力を感じている。

### ※ 軍国主義との訣別

スタートした戦後の一年を過ぎた伊敷兵営跡から母校に帰ったのは、翌二十一年の十月

末だった。米兵たちが引き揚げた後の校庭からは奉安殿（天皇の写真と教育勅語を内蔵）や忠魂碑（台石に卒業戦没者の名前が刻まれていた）が消えて、校庭の一隅には将校たちが住居として使っていたカマボコ兵舎（後に教職員住宅として使用）が数棟残っていた。もちろん思い出の彼らのトイレは跡形もなく整理されて―だ。

授業が始まったのは十一月からだ、その翌年三月までのいわゆる中学三年後半時代の記憶は、学校の成績が人生最悪（同級三百名の中のビリに近かった）だったことぐらいしか覚えていない。むしろ教育現場でも混乱が続く。この一年間に校長が三回も交代（一人は軍国主義教育の責任をとり辞任、代わった校長は同責任で公職追放など）した一事を取ってもそれは判るが、僕らが当面した笑うに笑えない事例をひとつ。

米軍軍政官が学校に講演に来ることが決まった。全校生徒を講堂に集めて迎えるというわけだ。教員たちはさて、どういう形でこの軍政官を迎えるかについて鳩首協議した。宮崎県で「起立、礼！」という号令で迎えたためにひどく怒られたという情報が伝わっていたからだ。軍政官の気嫌を損ねないためにはどうすべきかに迷った挙句の結論は「起立、礼！」という軍隊式の号令が良くないのだろう。ならば号令をやめて、軍政官登壇と同時に最前列の生徒に黙って起立礼をさせる。後の者は全員黙ってそれに倣うことにしようということに衆議一決した。

その軍政官の話は記憶にないが、講演の後、教職員がひどく軍政官に怒られた話は間もなく洩れてきた。「初めてやって来る相手（自分）が何者かも判ってないのに、なぜ生徒に起立や礼などさせるのか！」というのだ。つ

まり権威に盲従する悪しき習慣は即刻やめなさいと。いやはや、当時は先生たちの頭の切り替えも、一朝一夕にはできなかったということだ。ついでに思い出したことだが、たしか三、四人はいた英語の先生たちの英語も、外国滞留経験のある一人を除いてアメリカ人には全く通じなかったと聞くものだった。



### ※ おじいさんになって死ぬる幸せ

さて、以上で僕の書きたかった時代の背景は一応終わるのだが、その翌年、つまり人生のターニングポイントを過ぎていよいよ本格的戦後教育にはいった(二十二年四月) 中学四年(新制高校に変わる前)の冒頭の授業で、生涯忘れられない名講義と出会えたお陰で自分の意識が整理された。そんな思いがあるの

で書き足しておきたい。

「世界史」を初めて習う冒頭の時間だった。面高先生(後に鹿大教授で転出)が質問した。

「エデンの園でアダムとイヴは幸せだったろうか、不幸だっただろうか？」と。まっ先に手を挙げたのが僕の親友で早熟の読書家。

自信満々に「何の苦労もない楽園に二人だけ、幸せそのものでした」というのだ。だが先生は「ほかに誰か？」と次々に指名するのだった。その間、僕など「はて、アダムとイヴって何者だ？ たしか八つ手の葉っぱで前を隠した土人みたいな男女の絵を見たことがあるがあれのこと？」と頭をひねっているレベル。もちろん先生の問いに対する答は「幸せだった」だけである。七、八名と同じ答を聞いてからおもむろに先生が言った。「はたしてそうだろうか？ この世にはまだアダムとイヴという二人の人間しか存在しないのだ。ほか

に比べるべき幸せも不幸も存在しなかった。ということは、アダムとイヴは幸せでも不幸でもなかったのではないだろうか？」

つまり世界史を学ぶにあたって、この世の価値観とは常に相対的なものであって絶対的なものなんて有りはしない。何と比べるかの問題だ—ということをも、冒頭できちんと教えておきたかったのだろう。

いま、自分の人生を振り返って大別すれば、はつきりと二色に分かれる。終戦までの真っ黒な人生と、その後の真っ白な人生である。もちろん真っ白な時代にだって人並みの失敗や苦勞もあれば大病にも遭遇してきた。だがそれすらも殆んど真っ白に思えるのは、いつもそれ以前の真っ黒と比較して考える習慣が身に染みついていてからだ。

山下清という放浪の画家がいた。彼が放浪を続けたのは徴兵忌避だったという説がある

のだそうだ。捕って検査を受けた時も彼独特の吃音で知的障害者を演じて逃れたのだと。

「兵隊さんは死ぬと靖国神社で神様になるっていうけどホントかな。ぼくはウソだと思わない。ぼくは神さまなんかになりたくないな。おじいさんになって死にたいな。」

これも山下清の言葉だそうだが、「普通のおじいさんになって死ぬる幸せ」を身に沁みて理解できるのは、やはり僕たちにはあの十四歳の春があったからだろう。僕などいまはもうおじいさんどころか、下手をすれば間もなくひいおじいさん（曾祖父）にすらなり兼ねないのだ。

ついでにここでもお節介な意見を一つ。近ごろ耳にする、若い世代が感じているらしい不幸感だが、その殆んどが単に（そこに）ある幸せに気づかないだけの不幸ではないのか。

だとすれば、この恵まれた時代を生きているというのに勿体ない話である。

### ※ 複眼で振り返りたい戦争の時代

僕が書き遺したいことの第一は言うまでもなく戦争をすることの愚かさだが、一口に戦争といっても大別すれば、戦わざるを得ない(防衛のための)戦争と、してはいけない(侵略のための)戦争があると言っているだろう。残念ながら昭和六年の満州事変から始まって太平洋戦争まで突入していった我が国の戦争はしてはいけない戦争だった—という意味で罪は深い。後になって振り返れば政界や軍閥の中にもかなりの戦争反対論者がいたというのに—だ。更にはその戦争を三百万人もの犠牲者を出しながら遂に原子爆弾を落とされるまで終わらせることもできずに、一億総玉碎

などとわめいていた愚かさを思うと、いまなお痛恨の思いがこみ上げてくる。

僕の母校には「君故山に瞑<sup>ねむ</sup>れ」という題の部厚い戦没者追悼録が残っている。集録されているのは四百名以上、涙なしには読めない頁が多いが、真珠湾攻撃で散った横山少佐の頁なども、ちよつと末尾の記録を読むだけでも無残だ。秀才の誉高<sup>ほまれ</sup>かった少佐の死で悲しみにくれていた母上も、三人の娘さんと共に二十年六月十七日の空襲で一家全滅、さらに少佐の兄上二人も中国戦線で戦死されているのである。

だが一方、僕らの学校は軍人学校として知られただけではない。芸術系の逸材も輩出しているのだ。反戦主義を貫いて太平洋戦争前夜に日本を脱出、米国に渡ってのちに絵本作家として名を成した八島太郎もそうである。

戦争中は米軍情報将校として敵側に回り、戦

場にばら撒く反戦ビラを作成したことは有名である。「バカな戦争はやめよう！」と、必死に呼びかける反戦ビラを戦場で見た美術学校時代の友人たちは「あ、これは岩松（八島の本名）の絵だ！」と一目で判ったというから運命は皮肉である。まぎれもなく〈愛国心〉というスタート地点は同じだったはずの同窓生同士が、戦場という殺しい合いの場で敵と味方に分かれることになったのだから……。

引合いに出すわけではないが例えれば知覧の特攻記念館も、出撃前のあの遺書に涙することは僕も同じだが、あれを書くまでに特攻兵たちが辿ったであろう何ヶ月、あるいは何年間かの煩悶や苦悩、場合によっては自分の運命の不条理を呪ったことすらあるのではないだろうか——などと裏の裏まで考えてしまうのが僕らの世代かもしれない。後になって知ったことだが、特攻作戦という無謀な作戦で

自分の部下を死なせるわけにはいかないと、最後まで強硬に拒否し続けた隊長がいたことを知ったときはむしろほっとしたものだった。尊い一命を賭けるに足る作戦ではないというのだ。こんな見識が日本の軍閥の中にも存在したことはひとつの救いといつていいだろう。あの戦争はさまざまの角度から振り返って見る必要があるのではないか。

いま一つ、戦後米軍の日本占領政策もそうだろう。公職追放、レッドパージ、東京裁判、憲法制定、その他の事件やトラブルなど数えあげたらきりがないほどの問題が語られてきた。だが、これはほとんどが敗けた日本側から見た問題点、逆にもし日本が勝つて米国に立駐していったらどうなっていたか——なんて立場で論じられることはない。それを思い浮かべるのがこれまた僕らの世代かも知れない。

若し日本が戦争に勝って米国に進駐していたらとてもあんなものでは済まなかったはず、つまり米軍が日本で起した問題などより遙かに大きな汚点を戦後史に残したのではないか。正直に言つて僕は今でもそう思っている。たしかに米占領軍が日本で起した問題が数々あつたことは事実には違いない。が、彼らがそんな問題を最小限に留めようと、懸命に努力したこともまた事実だつたことを僕はは見てきたのだ。トイレ造りを自分たちでやつたから—なんてことばかりではない。街のあちこちに立っていたMPやSPは日本人に睨みにらみを利かせるというより、自国の兵隊たちを統制するために見張つていた。残念ながら長年日本の軍隊を間近に見てきた僕らには、どう考えてもあれ以上に人道的に日本軍が振る舞えたとは思えないのだ。陽気なあの若きヤ

ンキーたちのためにも、これだけは一言触れておきたかった。

僕が進学のため東京で暮しはじめたのは二十五年から。日比谷のGHQ（第一生命ビル）にまだマツカーサーがいた（占領下）時代だが、それから後の彼らを見てもその考え方に变りはなかつた。

### ※ いまこそ歴史に学びたい

二十世紀はたしかに破壊と殺戮の時代だつた。二次大戦後も幾多の動乱が続き、それは今世紀にはいつても終わる気配はない。「だがいくら何でももう核戦争にまで発展することはないだろう」という気分が、僕自身にもだが、六十九年間も戦争を放棄してきた日本中にも蔓延しているのではないだろうか。いや、確実にそうと信じられるのであればもちろん僕も、こんな下手な文章を長々と書きは

しない。たしかに核が戦争の抑止力として機能している部分はあるだろう。だが、その抑止力が利いているうちにこそ克服しなければ危ない課題が多いのも事実ではないか。そういう気がして仕方がないのだが――。

結論を急ごう。世界はこれから東アジアの時代。とすればアセアン諸国とももちろんだが、まずは日本、中国、韓国が強調して先頭に立たなければならぬのは自明の理。なのに我が国はいまこの両国と最悪の関係。僕はもう何度もちこち書いてきたが（戦争前夜のニオイ）すら煙りはじめた感がある。互いに過去にまで遡って相手国の非を責めるだけで関係が良くなるわけではない。三国の現状はどっちもどっち、自国の正当性を声高に主張し合うだけという意味では五十歩百歩だ。ここは先ず三国の中の一国が冷静に一步踏み止まり、真の説得力とは何かを学習し直して

外交政策を再構築すべきだろう。とすればその牽引役を果たすべきは当然、さきの大戦で唯一の被爆国となったわが国以外にないはず。集団的自衛権云々に言及するつもりはさらさらないが、防衛に備えるという名目の軍備拡張が、遂には大戦への導火線になったという過去の歴史を思い返せば、これで大丈夫などと政府首脳が得意になっている場合ではないだろう。

前置きが長くなったが、最近、僕が帰依するお寺の広報誌（最友）に掲載された「武士道」の著者、新渡戸稲造の言葉を引用させて頂いて締めくくりとしたい。

新渡戸稲造は明治から大正にかけて国際連盟事務次長（のち貴族院議員）など務めて各国の外交官からも「ミスター・ニイトベ」と敬愛された国際人だが、その著書の中で「民族優位説の危険」や「歴史の贗造慎むべし」

という持論を展開し、大和民族は優秀であるという妄想を背景にして中国や朝鮮を蔑視することの愚かさを指弾している。それもだが、肝に銘ずべきは彼の晩年の名言だろう。「よきインターナショナルリストはよきナショナルリストでなければならぬし、その逆も当然そうである」。つまり「真の国際人は秀でた憂国者でなければならぬし、真の憂国者は優れた国際人でなければならぬ」ということだろう。寄ると触ると、やれ右だ左だとか、親中派や反中派、あるいは皇国史観だ自虐史観だなどと色分けしたがる空騒ぎもそろそろ卒業して真の、それこそインターナショナルな説得力とは何か―を考えるべき時ではないのだろうか。新渡戸稲造の英語での著書「武士道」は米国大統領ルーズベルトが読んで感動し、若き日のケネディ大統領も愛読したというが、我が国には学ぶべき歴史も、学ぶべ

き先駆者も多いはず、いまこそ先人に学んで、周辺諸国から一步抜け出して先頭に立つて欲しいものだ。

少なくとも僕たちは孫や曾孫の時代に（おじいさんになって死ぬる幸せ）という、ささやかな願いを奪い去るような愚行だけは犯さないで欲しい。

（エッセイスト）



## 編集後記・・・

■10号をお届けします。貞子さまとお別れしてはや四年。「光陰矢の如し」です。庵主重朝氏と中学同学生で闘病中の益壽滋雄医師から「肺癌の記」を寄稿いただきました。命を見つめる報告に身を正して拝読しました。節目の号に長男の入院重伸氏に投稿頂きました。また、入来出身で奈良在住の中山とし子様から入来時代の思い出を寄せてもらいました。さらに輪が広がりました。後は常連の筆、いよいよ佳境入りです。毎年多方面の話題を「ログ」調で寄稿して居られた百田氏が病に倒れられお休みになりました。最近退院されたそうですので、来年の復帰を期待します。(中西喜彦)

■庭にトンボもチョウチョも見かけなくなつたと洪潮記の巻頭言にありますように、北薩にある我が家でも今年は、降るよつな蝉しづれを聞くことがなく、また日照時間が足りなかつたからでしょうか、毎年楽しみにしている鉢植えのミニスイカが熟れずじまいでした。生態系の変化、気候の変化が気になります。お盆が過ぎれば本誌の編集に取りかかるのが年中行事として定着した感があります。この時期は編集に専念できるようスケジュールを調整してお

くこととなりますが、鹿児島市内や郡山のレストランに落ちあつてのランチを食べながらの編集作業もまた楽しいものでもあります。(下土橋渡)

■入来院家御当主は御腰のお具合よろしくなく、当方がねて昵懇のガンをもち治す温灸師をよかつたらとの前提で御前に紹介したいし処、いたくお気に入りにあそばされ、御回復の兆しもあらんことこそ喜ばしけれ。抗ガン剤副作用にて美髪失いし女性が、ああら妖しや、温灸師によりて、再び緑の黒髪風になびき、ガンをもちそこかにいっちゃったってんだから、驚愕のほかなし。世にはまだまだ不思議の例少なからず。幽霊も未確認飛行物体も実在疑わぬ元新聞記者より。(澁谷繁樹)

「炬ばたセイ談」 第10号

炬ばたセイ談会会長

桐野三郎

編集担当 中西喜彦・下土橋渡・澁谷繁樹

事務局〒895-1402

薩摩川内市入来町浦之名130

入来院重朝方

TEL・FAX 0996-44-3586

印刷 新大同印刷株 (0996-30-1811)



平成26年秋  
第10号

〒895-1402

薩摩川内市入来町浦之名 130

炉ばたセイ談事務局